

犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書

——蓼科山北麓における堂宇を中心とした中世遺構群の調査——

1978

長野県佐久建設事務所

望月町教育委員会

序

ここに刊行されるに至った報告書は、国道142号線バイパス建設工事に伴ない、昭和53年3月に行なわれた犬飼遺跡の調査報告書であります。

近年、社会の急激な変化に伴ない増々開発事業が栄んになってきておりますが、これに対処するように各地で発掘調査が行なわれております。望月町に於てもその例にもれず、僅かづつではありますが開発に伴なう発掘調査の件数が増してきつつあります。最近でこそ地域の歴史研究がすすみ、文化財に対する関心が高まり、埋蔵文化財等に理解が深まりつつありますが、かつては学術的にも価値の高い文化遺産が活用されないまま埋没してゆきました。

今回行なわれた発掘調査は、犬飼遺跡に於ける古代の姿をありのままに記録として残し、郷土の歴史を解明し、今後の研究に役立てていこうということで、長野県佐久建設事務所の多大なる御協力のもとにすすめてまいりました。

調査に際しましては、調査団長に森嶋 稔先生をお願いし、遠方各地からは調査員、調査補助員の各氏、また地元望月町からも多くの方々をお願いしました。森嶋先生をはじめとする各調査員、調査補助員の御尽力は申すまでもなく、地元の皆さんの総力をあげての熱意あふれるお力添えによって極めて多くの成果をあげて終了することができましたことは、今後に亘る大きな基盤となるものであります。ここに甚深な敬意と謝意を表する次第であります。

望月の里で芽ばえた文化に対する意識を今後大いに育ててゆきたいと考えている所存でありますし、また本書が研究者の皆さんそして広く社会の人々に役立てていただければありがたいと思っております。

昭和54年3月

望月町教育委員会
教育長 佐藤初雄

例 言

- 1、本書は、昭和53年に長野県佐久建設事務所と北佐久郡望月町教育委員会との契約に基づいて作成した発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査は、望月町教育委員会が委嘱した発掘調査団によって行なわれ、本書の作成も発掘調査団が行ない、発行は望月町教育委員会が行なった。
- 3、遺構図は、森嶋稔、塩入秀敏と福島邦男が整図を担当した。
- 4、遺物の実測は、塩入、坂口直樹、福島で行ない、整図は塩入と福島が行なった。
- 5、写真撮影は、渡辺重義、倉沢克彦、福島が行ない、図版作成は柳沢吉男と福島が行なった。
- 6、本文の執筆は、文責を文末に明記した。
- 7、本文の編集は福島が行ない、森嶋 稔調査団長の校閲を受けた。
- 8、遺物及び関係諸記録は望月町教育委員会で一括保存している。

目次

序	
例言	
第1章 発掘調査の動機と経過	1
第1節 発掘調査の動機と目的	1
第2節 調査の構成と調査団の編成	1
第3節 発掘調査日誌	3
第2章 遺跡の環境	6
第1節 地理的環境	6
第2節 考古学的環境	6
第3章 遺構と遺物	10
第1節 第1号住居址と出土遺物	10
第2節 第2号住居址と出土遺物	10
第3節 第3号住居址と出土遺物	13
第4節 第1号集石土塚と出土遺物	13
第5節 第1ピット群と出土遺物	15
第6節 第2ピット群と出土遺物	16
第7節 第1配列ピット群と出土遺物	17
第8節 第2配列ピット群と出土遺物	19
第4章 包含層出土遺物	21
第5章 総括	28

挿 図 目 次

第1図	犬飼遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図	7
第2図	犬飼遺跡遺構全体図	11
第3図	第1号住居址実測図	12
第4図	第2号住居址実測図	12
第5図	第3号住居址実測図	13
第6図	第1号集石土壇実測図	14
第7図	第1ピット群実測図	15
第8図	第2ピット群実測図	16
第9図	第1配列ピット群実測図	18
第10図	第2配列ピット群実測図	19
第11図	第1配列ピット群出土遺物	20
第12図	第2配列ピット群出土遺物	20
第13図	包含層出土遺物	22
第14図	包含層出土遺物	23
第15図	包含層出土遺物	26
第16図	包含層出土遺物	27
第17図	中世の堂宇と思われる遺構	29

図 版 目 次

- 第一図版 犬飼遺跡全景・犬飼遺跡周辺の遠望
第二図版 西側調査地区全景・調査風景
第三図版 調査風景
第四図版 第1号住居址
第五図版 第2号住居址・第3号住居址
第六図版 第1号集石土壇
第七図版 第1ピット群
第八図版 第1ピット群・第2ピット群
第九図版 第1配列ピット群
第十図版 第1配列ピット
第十一図版 第1配列ピット
第十二図版 第2配列ピット群
第十三図版 第2配列ピット
第十四図版 第1、第2配列ピット群出土遺物
第十五図版 包含層出土遺物
第十六図版 包含層出土遺物
第十七図版 包含層出土遺物
第十八図版 包含層出土遺物
第十九図版 包含層出土遺物

第1章 発掘調査の動機と経過

第1節 発掘調査の動機と目的

大飼遺跡は、昭和51年7月に県文化課の丸山敏一郎氏と福島とで上越新幹線にかかわる埋蔵文化財の分布調査を行なった折、字大飼地籍に平安時代の遺跡があることを確認した。その後、国道142号線バイパス建設工事によって大飼遺跡が破壊される恐れがあるということで、昭和52年10月7日に県文化課の関孝一氏と福島とで再度の分布調査を行なった結果、大飼遺跡を発掘調査し、記録保存をする必要性を講じた。同11月2日に再度142号線バイパス建設敷地内全体を福島が分布調査を行ない、本大飼遺跡及び大塚古墳群中3基がバイパス敷地内にかかることが解かり調査の必要性を再確認した。(後程解ったことであるが、布施の字山寺地籍にある山寺遺跡も本線のルートにかかるということで、調査の必要があると思われる) そのため、昭和53年2月16日に望月町教育委員会事務局により、発掘調査のための準備会議が開かれた。同3月16日に、佐久建設事務所、発掘調査団、望月町教育委員会事務局の三者による調査に向けての打ち合わせ会を行なう。3月8日に器材の運搬、3月10日には、佐久建設事務所立合いのもとに、調査範囲設定のためのクイ打ちを行なう。3月11日、竹花組の協力を得て、バックフォンによる桑の抜根やヨシの撤去作業を行なう。3月12日には、雪の降りしきる中グリッドの設定を行ない、3月13日、いよいよ調査の開始となった。

(福島邦男)

第2節 調査の構成と調査団の編成

- 1、遺跡名 大飼遺跡
- 2、遺跡所在地 長野県北佐久郡望月町大字茂田井字大飼
- 3、調査委託者 長野県佐久建設事務所
- 4、調査受託者 望月町教育委員会
- 5、調査面積 2500㎡
- 6、調査期間 昭和53年3月13日～3月31日
- 7、調査方法 グリッド方式による平面発掘(3m×3m)

第2節 調査の構成と調査団の編成

8、調査団の編成

団 長 森嶋 稔 (日本考古学協会会員・上山田小学校教諭)

調査主任 福島邦男 (日本考古学協会会員・望月町天来記念館学芸員)

調査員 塩入秀敏 (長野県考古学会会員・上田女子短大講師)

波辺重義 ()

坂口直樹 () ・独協大学学生)

倉沢克彦 () ・信州大学学生)

調査補助員 大沢洋三、岩下清海、鈴木 高、小野沢甚之丞、桜井昌晃、真山伍一郎、桜井正人、(以上望月町文化財調査委員) 関田和子、手塚恭子、野上あさこ、坂口栄子、峯村順子、(以上上田女子短大学生) 高羽和子、金井寿子 (以上立正大学学生)

作業員 大沢礼市、大沢弥生、塩沢振一郎、橋詰正秀、武重正史、常田智弘、武重義治、大沢けい子、土屋正義、柳沢吉男、福島茂子、武重節子、寺島一代、春原久子、小松たま、竹花藤子、竹花キヨ子、竹花ノリ子、小林三代、小林はつみ、平賀さちえ、竹花かつえ、安川米子、桜井 泉、川井志づ、桜井けん、依田浩子、宮崎文枝、川井 幸、丸山敏彦、土屋昭子、市川貞雄、吉沢弥太郎、小林満江、花沢愛子、清水喜代江、柿崎 颯、桜井暉郎、倉見正三、寺島いくよ、武重節子、武重ふさ子、竹花けい子、川井節子、阿部照子、市川明子、小林トミ子、小松すみよ、小松ていこ、竹花晋一、諏訪道子、市川明子、重田秋恵、牧野初美、竹花千代子、竹花ちい子、宮崎ふじ子、土屋秋子、工藤たつ子、川井つき子、桜井こと、竹花秋子、宮崎米子、竹花八重子、川井和美、小林幸子、竹花安子、小林 進、臼田ミユキ、岩城啓一、諏訪定雄、岩下純武、常田さだ子、武重とし子、寺嶋やえみ、桜井隆彦、安川英男、望月高校生徒38名、岩村田高校生徒

協力者 竹花組、坂田孝三、江本 守、大草昇一、比田井正弘、市川博康、上野哲男、比田井和男、桜井一茂、大森 一、竹重百枝、六川賀代子、比田井真知子、土屋裕美子、大森徳子 (以上望月町青年婦人部)

事務局協力者 佐藤初雄 (教育長)、依田慎三 (教育次長)、吉川 徹 (同和教育課長)、高橋重雄、松本荘雄、平林一郎、小林三枝子、上野早苗 (以上望月町教育委員会) 竹花謙一郎 (望月町公民館長)

調査事務 篠原一人 (社会教育課長)、大森睦男、小林良子、

9、報導機関 信濃毎日新聞、朝日新聞、中部日本新聞、NHKテレビ、望月町公民館報、
(事務局 篠原一人)

第3節 発掘調査日誌

3月13日 (月) 晴れのち曇り

調査現場にて、8時30分より結団式を行なう。大沢文化財調査委員長の挨拶、塩入調査員より、調査員及び調査補助員の紹介、福島調査主任より遺跡の説明、調査の方法や掘り方等の諸注意の説明があり、作業員を4班に班編成をして調査が開始された。

本日すでに33グリッドを掘る。ピット及び不明の落ち込みが見つかる。平安時代の土師器や須恵器が比較的多く出土する。

3月14日 (火) 晴れ

昨日に引き続きグリッド掘りを行なう。遺跡の中央を南北に走る農道から東側部分を重点的に掘る。直径30cm程度の柱穴と思われるものや、住居址プランと思われるものが見つかる。遺物は、須恵器の甕形土器の破片や土師器の坏形土器の破片がかなり出土している。

本日は昨日と合わせて約90グリッドを掘る。

3月15日 (水) 晴れ

本日も80名という大スタッフでグリッド掘りが進められた。相変わらず柱穴と思われる落ち込みが検出されたり、土師器、須恵器が出土する。また、縄文式中期土器と石鏝も出土する。

3月16日 (木) 晴れ

グリッド掘りを進めるとともに、今までで確認された落ち込みの再確認と範囲の確認作業を行なう。遺跡全体を通しての東西セクションベルトの設定を行なう。住居址であると思われていた落ち込みは、疑わしい所もある。また、耕作による溝もしくは破壊されている部分もあることがしだいにわかってきた。遺物は、他に古墳時代の高坏の脚部が出土している。

3月17日 (金) 晴れ

本日も大変良い天気恵まれ、作業は順調に進んだ。G₁₂グリッドより7.8cm×4cmの薄い自然石に、線刻面らしきものが書かれているものが出土する。丁度この犬飼の地に建てられた住居を通して浅間山を臨んでいるように見える。またI₁₈グリッドより縄文式時代のものと思えるスクレーパーが出土する。

3月18日 (土) 晴れのち曇り

新にグリッドを拡張するとともに、今まで検出されている落ち込みの再確認を行なう。

G₁₋₃、H₁₋₃、I₁₋₃にかけて新たな落ち込みを検出する。またG₂₋₃グリッドよりピットを検出する。D₂₄₋₂₅グリッドより住居址と思われる落ち込みを検出する。切り合いがあるかも知れない。遺物は須恵器の坏形土器片、高坏の脚部、鉄製品が出土する。

耕作土の下は、粘質土であり日に照らされ固くなっているため非常に掘りにくい。

第3章 発掘調査日誌

3月19日 (日) 雨

未明からの雨で本日は宿舎にて土器洗いや今まで調査された内容の整理を行なう。

3月20日 (月) 晴れ

昨日の雨に打って変って大変良い天気であった。農道の東側H・I・J列のそれぞれ27、28グリッドに於て掘立柱の建物址と思われる配列ピットが見つかる。ピットは方形を呈しており、それぞれ180cm (1間)を測り規則的に並んでいる。北西隅のものは65×73cmを測りやや間隔の異なる所もある。恐らくは3間×2間の南北に長い建物址であるかと思われる。

他地区で検出されている落ち込みの精査もかなり進められた。

3月21日 (火) 晴れのち雪

朝から大変良い天気に恵まれていたが、午後からは大雪になった。雪の降りしきる中作業が進められた。

H、I、J、Kのそれぞれ8、9グリッドより直径20~30cm程度の柱穴が多数見つかった。比較的規則的に配列されている部分もあり、建物址の存在をうかがわせる。また、G5-8グリッドからも直径の大きな柱穴が幾つも見つかる。

本日まで確認された遺構(落ち込み)は住居址3棟、小柱穴群5ヶ所、配列ピット群1ヶ所(掘立柱)であり、今後の調査に期待をよせるところである。

3月22日 (水) 曇り

昨日の午後から降り出した雪は、今朝になって10cmの積雪となったので、現場作業は中止となり、宿舎にて土器洗いを主体とした遺物整理を行なう。

3月23日 (木) 雪のち晴れ

雪の影響で本日も現場作業は中止となる。したがって遺物整理を行なう。

3月24日 (金) 晴れ

2日間休んだ現場作業は、また再開された。配列ピットの掘り下げを行なう。柱痕及び掘り方が明瞭に確認される。

3月25日 (土) 晴れ

配列ピット群のピット掘り下げと、実測のためのヤリ板を組み始める。また、調査区西側で検出されたピット群のピット掘り下げを行なう。さらに第3号住居址の掘り下げも行なう。

3月26日 (日) 晴れ

朝から大変良い天気であった。調査日程がせまってきたため、各遺構の掘り込みと実測が行なわれた。本日新たにH1-2グリッドに於て、集石を伴う土域が確認される。

3月27日 (月) 晴れ

本日は、配列ピット群の実測、第1号・第2号住居址の実測、西側第1ピット群の実測を行なう。また合わせて西側第2ピット群の掘り下げを行なう。

3月28日 (火) 雨のち曇り

未明より間断なく降り続く雨のため、現場作業は中止となり、宿舎にて遺物洗いを行なう。

3月29日 (水) 晴れ

H₁~₂グリッドで確認されていた土塚の掘り込みを行なう。この土塚は、比較的大きな石を中に積み上げ、しかも二段になっていた。中から木炭と僅かな土師器が出土している。

本日新にまた、配列ピット群が検出された。第1配列ピット群のところからほぼ真北にやや寄った所である。全体からすると2間×3間になるかと思われる。これを第2配列ピット群とする。

3月30日 (木) 晴れ

集石土塚の掘り下げ、西側第1ピット群の実測。第3号住居址の掘り下げと清掃、第2配列ピット群の確認と掘り下げ、それに遺跡の全体測量を行なう。

3月31日 (金) 晴れ

天気のわりあいには風の吹く寒い一日であった。本日は調査最終日なのでいちだんと活気がみなぎっていた。

第3号住居址の写真撮影と測量、第2配列ピット群の清掃、写真撮影それに測量、また遺構全体測量を行なう。

テントや機材の撤去を行ない全ての調査を終了する。後打ち上げ会を行なう。

(福島邦男)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

犬飼遺跡は、蓼科火山によって形成された低位な丘陵の南斜面に位置している。この茂田井地区一帯は、同様の低位な丘陵が南北に幾筋も走っており、いずれも小規模でなだらかな地形を成している。しかし、御牧原台地のごとく800m~700mも続く平坦面があまり発達してはおらず、八重原台地の一連の地形であるとはいえ、茂田井付近ともなれば徐々に高度を増し蓼科山の裾野に連なっている。この南北に走る丘陵は、茂田井付近にあつては、新世代第四期更新生のローム及び火山岩屑によって形成されており、表土下十数センチの所ですでにみられる。また、砂礫がかなり厚く堆積している部分も見られる。遺跡はこれらのいわゆる筋ともいえるべき南北に走る丘陵の緩斜面に立地している場合が多い。

犬飼遺跡の眼下には、規模の小さな下川が流れており、かつてはこの川によって形成された小河岸段丘が発達している。この地帯には、3ヶ所の湧水と1ヶ所の鉱泉があり、現在でもかなり水量が豊富である。低地に於てはむしろ湿地状になっており、この湿地帯を望む所にこの付近一帯の遺跡が存在しているとも言える。

いずれにしろ本遺跡は、南向き緩斜面で、非常に日当りの良い所に立地していると言える。

(福島邦男)

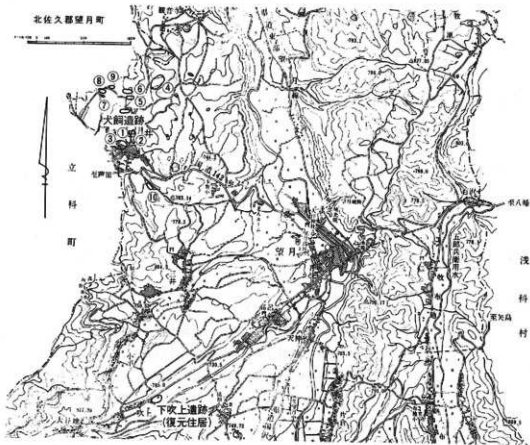
第2節 考古学的環境

茂田井地域は、立科町と境を隔てる丘陵の東側にあり、ややすり鉢状の地形を成し、観音寺に向って流れている下川の浅い谷の両側に遺跡が集中している。これらの遺跡は、台地とやや湿地性に富む水田面に立地している縄文式時代の遺跡と丘陵斜面あるいは扇状地状地形に立地している平安時代の遺跡とに大きく大別することができるが、台地に立地する奈良時代から平安時代にかけての寺院址を思わせる所もある。

以下遺跡ごとにその概要を述べておく。

①、天神反遺跡（茂田井字天神反）

犬飼遺跡の南方200mの上部平坦な台地上に位置している。この遺跡は、縄文式時代中期と奈良時代~平安時代の遺物が多量に出土している。まだ発掘調査はないが、縄文式時代中期後葉



第1図 犬飼遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図 (1:40,000)

の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、石皿、凹石、多孔石、石棒、石匙、土偶等ありとあらゆる生活セットが耕作や表面採集の時にみつがっている。縄文式時代の遺跡としては望月町の中では最大級のものである。また、同様の地点に布目瓦がやはり多量に散布しており、かつて信濃の妙楽寺がここにあったという伝説がある。

②、用水尻遺跡 (茂田井字用水尻)

本遺跡は、天神反遺跡のある台地のすぐ下、東側の水田及び畑地にある。小字用水尻という地名の通り、湧水から流れ出る水が、本遺跡の中央を通っており、非常に水量の豊富なところである。恐らくは天神反遺跡と一連の遺跡であろうと推察できうる。現在でもかなり遺物の散布量が多いが、縄文式中期末葉の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石棒、石匙、ヒスイの曲玉、土偶等が出土している。

③、花立遺跡（茂田井字花立）

花立遺跡は、天神反遺跡に続く南側の台地上と西側の第一段丘上に位置している。遺跡の中心部には現在人家が立ち並び、また大部分は水田となっている。本遺跡も恐らくは天神反遺跡と用水尻遺跡との一連の遺跡であろうと思われる。出土遺物には、縄文式時代中期の深鉢形土器をはじめ、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石臼、石棒等の豊富な遺物が出土している。

④、夜討村遺跡（茂田井字夜討村）

茂田井地区に於ては平安時代を代表する遺跡である。夜討村遺跡は、犬飼遺跡の対岸の扇状地、下川の流れる低位水田面より東側へやや登った所に位置しており、東西200m南北150mを測る大きな遺跡である。近年、朝鮮人蔘耕作や畑地の区画整理によってかなり破壊されてしまった。出土遺物は、須恵器を中心とした坏形土器や壺形土器が多数あり、そこに土師器が伴うというあり方をもっている。また灰釉陶器も僅かながら出土している。

⑤⑥、大仁反及び大仁反尻遺跡（茂田井字大仁反・字大仁反尻）

本遺跡は、犬飼遺跡の北方350mの丘陵上に位置している。この二者の遺跡は、犬飼遺跡の存在する丘陵と沢を分けて存在する別な丘陵上にあるが、立地的には犬飼遺跡とかなり似かよっている。犬飼遺跡発掘調査中に朝鮮人蔘耕作のための深掘りを行なっている時に5基以上のカマド跡がみつかり、また多数の須恵器坏形土器、壺形土器、長頸壺、土師器の壺形土器が出土した。すでに調査せずに大部分が破壊されてしまった。恐らくは、犬飼遺跡・夜討村遺跡と並ぶかなり大規模な集落址があったと思われる。

⑦、堀込峯A遺跡（茂田井字堀込峯）

堀込峯A遺跡は、望月町と立科町とを分ける南北に走る尾根の東側斜面に位置しており現在はブドウ畑となっている。ここからは、犬飼遺跡をはじめ天神反遺跡や夜討村遺跡など、この付近一帯の遺跡を全て見わたすことができる。遺物は、土師器と須恵器で散布量はあまり多くない。

⑧、堀込峯B遺跡（茂田井字堀込峯）

望月町と立科町とを分ける尾根上を通過している農道の西側の畑地が遺跡である。この付近では最も高い尾根の一つでもあるため、望月分と立科分とを一処に見わたすことができる。遺物は、ごく僅かな土師器と須恵器が散布している。

⑨、南青木原遺跡（茂田井字南青木原）

本遺跡も、堀込峯A及び堀込峯B遺跡と同様の尾根上に位置しており、遺物は土師器と須恵

器で散布量が少ない。

⑩、又久保遺跡（茂田井字又久保）

又久保遺跡は、望月から国道 254 号線で茂田井に入った南側の低位な沢状の地形を成している所にある。ここには、尾根の中腹を通る小さな峠道があり、付近には「古道」と名付けられている小字名が残っている。出土した遺物は、小形の耳皿、手づくねの小壺があり、いわゆる祭祀用遺物として捉えることができる。これらは、先の例にもれず朝鮮人蔘耕作の時に出土したものである。

以上概略的に周辺に位置する遺跡を述べてきたが、犬飼遺跡と近似するものとしては、やはり夜討村遺跡と大仁反、大仁反尻遺跡があげられるかと思われる。しかしこの三者も犬飼遺跡と比較すると若干时期的に新しさが目だつ。その意味では犬飼遺跡が茂田井地区の平安時代の遺跡としては、最も古く位置づけられ、重要性が認識される場所である。（福島邦男）

第3章 遺構と遺物

本調査で確認された遺構は、平安時代の住居址3棟（第1号～第3号）、同集石土壇1基、同ピット群2ヶ所（第1号、第2号）、中世の配列ピット群2ヶ所（第1、第2）、同土壇1基である。遺物は、全般に出土量は多かったが遺構に伴うものが少なく、遺構の時期決定には少々難しい面もあった。調査地域は全体にかなり遺構検出面まで浅く、また耕作による破壊が激しく明確に捉えうるものが少なかった。

第1節 第1号住居址と出土遺物

遺構（第3図・第4図版）

本址は、東西に長い調査地区の中央よりやや西側で、しかも最南端の所で検出された。かかるグリッドは、K₁₃・K₁₄・K₁₅である。

他の遺構と同様、耕作により大部分が削られてしまっており、北側の壁の一部と東側のラインが確認されただけで、全体プランを確認することはできなかった。床面は、北側壁面寄りと柱穴のP₂～P₄付近に僅か残されているだけで、他は全く存在していない。柱穴は北側壁面寄りに5個検出しているが、10cm～15cmと浅い。P₂には、底に平石が入っている。

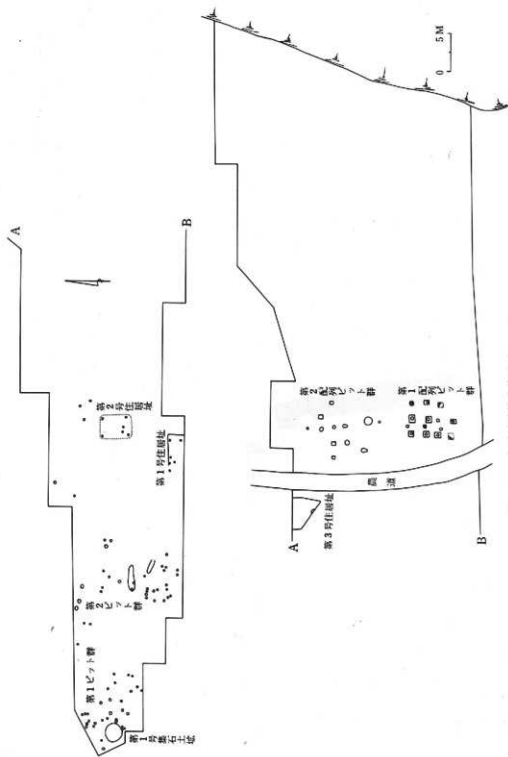
遺物

本址出土の遺物は、P₂より土師器と須恵器の環形土器細片が出土しているが、図上復元ができないほどのものである。他からは全く出土していない。（福島邦男）

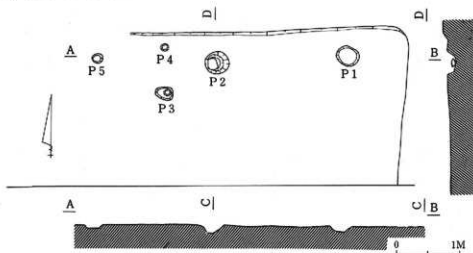
第2節 第2号住居址と出土遺物

遺構（第4図・第5図版）

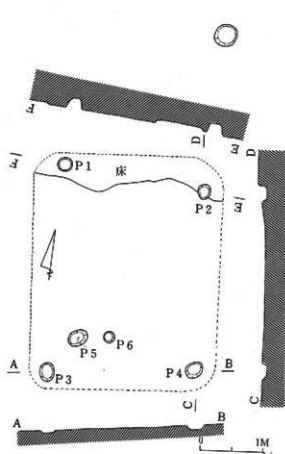
本址も、第1号住居址と同様耕作によりほとんどが破壊され、壁すらも確認することができなかった。検出し得たものは、4個の主柱穴と他に2個の柱穴、また北側の2個の柱穴を結ぶ所に僅かながらの床面が残存し、他は全く確認できなかった。柱穴の深さは、深いもので（P₁・P₂）15cm、他は、5cm～10cm程度で僅かに痕跡を残す程度である。



第2図 大跡遺跡遺構全体図 (1:500)



第3図 第1号住居址実測図 (1:60)



第4図 第2号住居址実測図 (1:60)

遺物

耕作による破壊のため本址に伴なう遺物は全くなかった。

(坂口直樹・福島邦男)

第3節 第3号住居址と出土遺物

遺構 (第5図・第5図版)

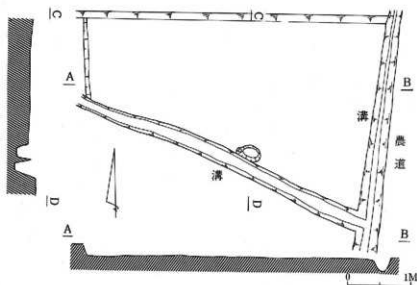
本址は、調査地区のほぼ中央の北側で検出された。かかるグリッドは、D24、D25である。

本址は、他の二棟の住居址に比べ、比較的良好な状態ではあるが、南側壁面は後世の溝によって破壊され、東側は農道脇のせんげによって破壊されている。しかも北側は、調査区域外となり調査することができないなどかなりの悪条件のもとで検出された。床面は、やや湿気の多い地区であるだけに、軟弱であり、床面かどうかとも疑わしい状態であった。柱穴は1個検出されているが、位置的にやや疑問が残る。

遺物

覆土中より土師器、須恵器の坏形土器片と変形土器片が僅かに出土している。これらは周りに攪乱があつたりしているため、住居址の覆土であるかどうかとも疑わしく、したがって、本址に伴なう遺物かどうかとも疑わしいものである。

(倉沢克彦・福島邦男)



第5図 第3号住居址実測図 (1:60)

第4節 第1号集石土塚と出土遺物

遺構 (第6図・第6図版)

この集石を伴なう土塚は、調査区の最西端に位置する第1ピット群中で検出された。かかる

第4節 第1号集石土壇と出土遺物

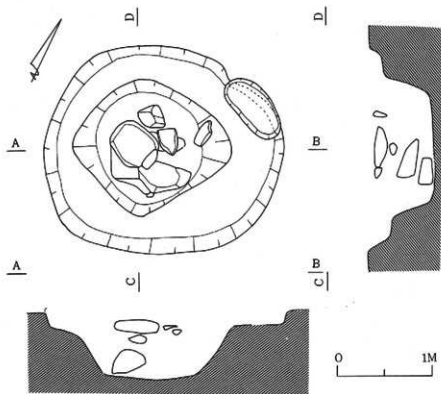
グリッドは、H₁、H₂、I₁、I₂である。東西253cm、南北220cmを測り、東西にやや長い楕円形を呈している。内側は二段に落ちており内側の落ち込みは、東西135cm、南北130cmのやや方形を呈している。深さは、土壇掘り込み部より内側の掘り込み部まで14cm～20cm、全体の深さは52cmを測る。集石は、内側の土壇内に25cm～50cm内外の河原石及び鉄平石が積み重なるように入り込んでおり、底部から内側の掘り切り部まで達している。石を取り除いた底部の状態は平坦で固く締まっていた。

本址は平安時代の遺構の中では最も良く保存されていた。

遺物

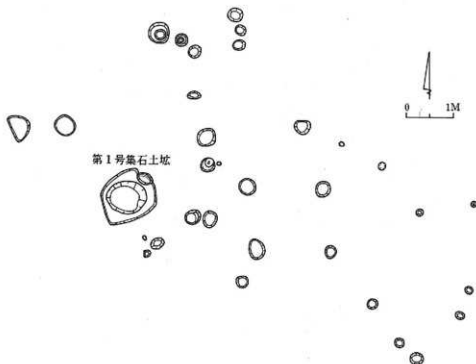
出土した遺物は、土師器、須恵器の環形土器片と甕形土器片で、比較的量が多かったが細片であり図に耐えうるものがなかった。出土位置は、集石に伴っているものが多く、石の間に入り込んでいるものがかなり見うけられた。またこの土壇内より炭が多量に検出されている。

このような性格から合わせ考えると、集石土壇墓的性格として捉えうるのではないかとの所検に立つが、确实なところはつかむことができなかった。(福島邦男)



第6図 第1号集石土壇実測図(1:40)

第5節 第1ピット群と出土遺物



第7図 第1ピット群実測図 (1:60)

遺構 (第7図・第7・8図版)

第1ピット群は、本調査区の最西端で確認された。かかるグリッドは、G2-3、H1-3、I2-3である。ピット群の範囲は、東西10m、南北7.5mを測り、この中に33のピットが存在している。大きさは、最も大きいもので直径45cm~50cm、小さいもので直径10cm~15cmを測る。形態は2種類に分けられ、そのひとつは、円柱状に掘られているもの、もうひとつは摺鉢状に掘られているものがある。円柱状に掘られているものには、掘り方と柱痕が明瞭に検出できたものが2個ある。これは、掘り方の中に柱を立て、粘土を詰めたものであることが解かる。

全体に柱穴の配列を捉えることはできないが、部分的に直線的に捉えうところがある。しかし、ほとんどがまばらに存在しており、ピット群の性格をつかむことができなかった。

遺物

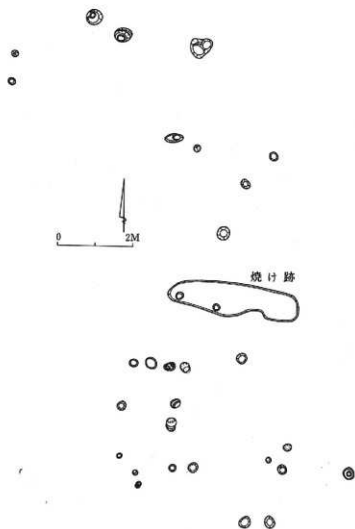
本ピット群より出土した遺物は、ピット内より出土したものに限り伴出遺物とし、その他ピット間で出土した遺物は包含層遺物として取扱った。

第6節 第2ピット群と出土遺物

ピット内より出土した遺物は、土師器、須恵器の環形土器、甕形土器が微量であるだけであった。全てが平安時代の遺物であるが、微細な資料であるため図上復元ができなかった。

(渡辺重義・福島邦男)

第6節 第2ピット群と出土遺物



第8図 第2ピット群実測図 (1:100)

遺構(第8図・第8図版)

本址は、第1ピット群から約10m程東寄りのところで検出された。かかるグリッドは、G7-9、H8-9、I7-9、J7-9、K7-9であり、かなり広範囲に検出されている。Kグリッドより南側は、これ以上調査できなかったのであるが、さらに広げればもっと広範囲なピット群として把握できたのではないと思われる。

ピット群の範囲は、東西12m、南北14.2mを測り、この中に32のピットが存在している。最も大きなものは40cm～45cm内外、最も小さなものは15cm～20cm内外であり、第1ピット群とほぼ同様である。また、掘り方と柱痕が明瞭に検出できたものは7個、さらに袋状ピットが1個確認されている。ピット群の中央部には、東西3.5m、南北90cmを測るかなり浅い土坑状の凹地があり、内部は焼けており焼土及び炭がほぼ全体から検出されている。この焼け跡を切って本ピット群のピット2個が存在している所から、同時期もしくはピット(ピット群)の方が新しいものと考えられる。

ピット群の性格を明らかにすることはできなかったが、中央部から南側のピットは、東西及び南北に配列されているようにも受け取れ、建物址のような性格をもつものがあつた可能性がある。しかし、ピットの大きさにより差があるし、深さにも差があるため疑問視されるところである。

遺物

本址も、第1ピット群と同様にピット内より出土したものだけ伴出遺物として取り扱い、他はグリッド遺物として取り上げた。

遺物の種類は、土師器、須恵器の環形土器片及び甕形土器片があり、いずれも微細である。特に集中して出土したピットは、建物址が想定される南側のピット群で、その中でも袋状を成すものから多く出土している。やはり平安時代の資料ばかりであり、本ピット群も平安時代に位置づけてもよいと思われる。

(福島邦男)

第7節 第1配列ピット群

遺構(第9図・第9・10・11図版)

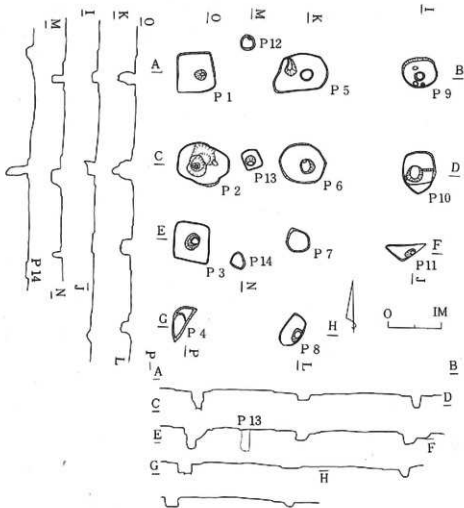
調査区域中央を横断している農道の東側脇に検出された遺構で、P1-14のピットによって構成される。P1-11のピットは、その間隔150cm～180cmで、南北2間、東西2間で南側西半分の部分に1間×1間の部分を張り出させた掘立柱の建物遺構である。P12-14はP1-11に比し、その位置が変であり、規模もずっと小型である。

ピットは径20cm～40cmをはかり、その形状は円形に統一される。しかし、その上部掘り方は、形状、規模ともに一様でなく、実にさまざまである。方形、円形、楕円形、三角形があるが、

第7節 第1配列ピット群

そのうち、P4・11の三角形のものは、もっと方形であったものが、後世の耕作によって削られてしまったものと考えてよいだろう。P4・11も含めて、方形のものは70cm×70cm、円形のもののは径40cm～100cmをはかる。また、掘り方の深さは、これも耕作によるものか非常に浅く、2.3cm～5cmをはかるだけである。

ピットの底に石を施設したものがあり (P1・3)、おそらく柱受けとして、柱の沈下を防ぐ方途と思われる。 (塩入秀敏)



第9図 第1配列ピット群 (1:70)

第8節 第2配列ピット群

遺構 (第10図・第12・13図版)

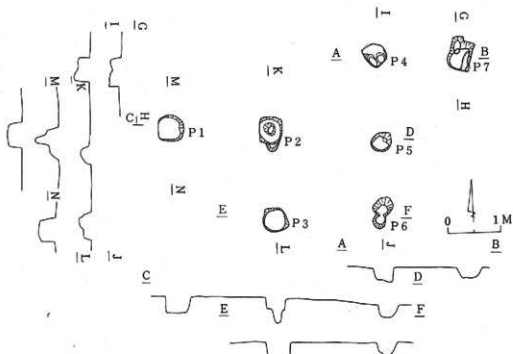
第1配列ピット群の北に、相並んで検出された遺構である。P₁~7の計7個のピットによって成るが、その配列状態、間隔に、規格性を有する部分と、そうでない部分がある。第1配列ピット群の如き整然たる配列とは言い難い。第10図の如く、東西にP₄・7、P₁・2・5、P₃・6の列が並び、南北には、P₂・3、P₄・5・6の2列が並んで、P₁及びP₇は独立してしまう。ピットの形状は円形乃至隅丸方形を基としている如くであるが、現状では規格的ではない。

しかし、第1配列ピット群と同じ方位をとる点、150cm~180cmの間隔を計測出来るピットがいくつか存在する点、第1配列ピット群同様に、何らかの掘立柱建物址と考えるべきであろう。

第1・第2配列ピット群出土遺物 (第11・12図・第17図版)

土師質土器

3点出土したが、いわゆる「かわらけ」である。第11図、第12図とも明赤褐色~赤褐色で、胎土には

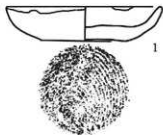


第10図 第2配列ピット群実測図 (1:70)

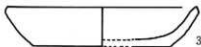
第8節 第2配列ピット群

砂粒を多く含むが、焼成はおおむね良好で、堅緻である。第11図1の口縁部内外面には油煤が黒く付着しており、灯明皿であるが、第1配列ピット群のP₁₃中より出土している点、大変興味深いものがある。

第12図3は、1、2とは異なり、胎土は精選され、こされた粘土を用い、整形良好で、色調は内外面とも乳灰白色を呈す。焼成は軟い。
(塩入秀敏)



第11図 第1配列ピット群出土遺物 (1:2)



第12図 第2配列ピット群出土遺物 (1:2)

第4章 包含層出土遺物

土器 (第13・14図、第14～16 図版)

相当量の出土があったが、殆んど全てが小破片で、全器形の判明するものは僅かに1点のみである。図示できるものは全て坏形土器及び埴形土器であるが、ほかに、甕形土器、壺形土器が存在する。

坏形土器 (第13図1～16、第14図17～19、26～28)

高台の付かないもの(1～19)と、高台の付くもの(26～28)がある。また、底部が回転糸切りのもの(1～18)と、回転糸切りの後へラ削りを行なっているもの(19)があり、高台は全て付け高台である。

1は、出土全須恵器中唯一点器形が判明するものである。口縁部径14.0cm、底部径6.2cm、器高4.3cmをはかる。焼成良好で、内外面とも灰色を呈し、口径部内外面に重ね焼き痕がのこり、体部及び底部内外面には火漚がみられる。

13～7は底部径6.0cm～6.2cm、8～16が6.6cm～7.4cm、17～19が8.0cmをはかる。また、1～19の底部は全て回転糸切りによって切り離されており、ロクロの回転方向は、11のみ右まわり(時計まわり)で、残りは全て左まわりである。高台付坏の底部は、なでが施されており回転方向は不明である。

26は、高台付坏で、高台と底部の一部を残すのみで、他の部分は失なわれている。その底部の中心と高台の間の部分に、拓影に示した通り、「佐」とも判読できる刻字が認められる。何を意味するかは不明であるが、注目されるところである。

埴形土器 (第14図20～25、29、30)

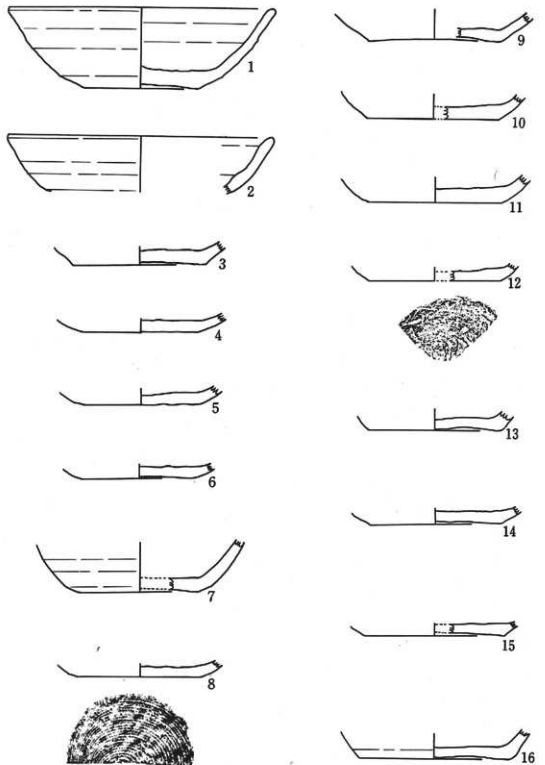
20～25は高台の付かない埴形土器、29、30は高台付の埴形土器である。器形が全て判明しないものが多いので、この分類には若干の問題点もあるが、便宜的にこのように分類した。

21は、内外面ともに灰色を呈し、火漚がのこり、胎土、焼成ともに普通の、極く一般的なものだが、底部観察によると、一度回転糸切りをしたが失敗し、再びはり付けて再度糸切りを行なっている。

20～23は回転糸切り、24、25は回転糸切りの後へラ削りにより底部の調整を行なっている。糸切りの回転は全て左方向である。

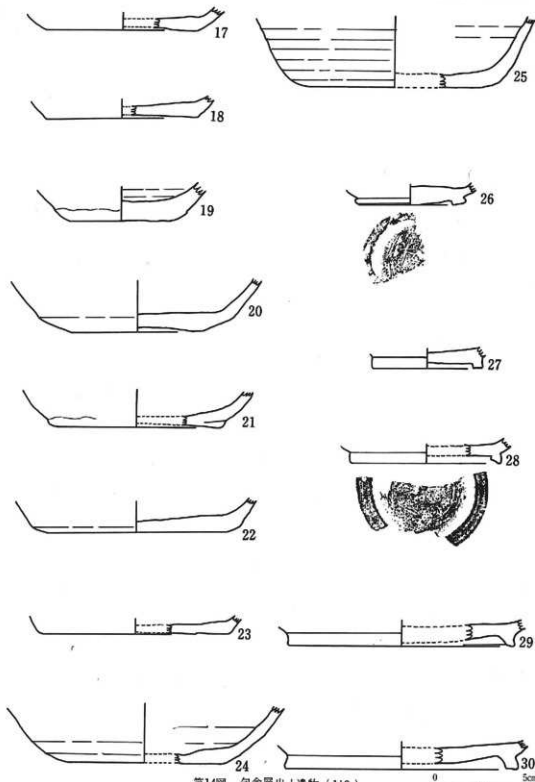
29、30ともに付け高台で、底部はなでが施され、糸切り痕は消されている。(塩入秀敏)

第4章 包含層出土遺物



第13圖 包含層出土遺物 (1:2)

0 5cm



第14图 包含層出土遺物 (1:2)

石器 (第15、16図、第18・19図版)

犬飼遺跡から出土した石器は、遺構に伴なうものが全くなかったが、包含層より砥石を中心とした若干の石器及び石製品が出土している。

時期は確実に把握できないが、縄文式時代のものと思われる全面加工の石器、打製石斧の欠損品、磨製石斧の基部、そして平安時代の砥石、研磨痕のある石片などがある。

縄文式時代の石器 (第15図23、24、25)

23は、打製石斧の欠損品であるが、基部及び先端部がなく、中央部のみ残存する資料である。ほぼ全面に剝離がみられるが使用痕は検出できない。

24は、長さ6cm、幅2.5cm、厚さ0.7cmを測る小形の石器である。やや長軸側の側面が内湾しており、そこに二次的な剝離が細かく成されている。硬砂岩製の真正な資料である。

25は、磨製石斧の基部である。A面、B面及び両サイドに丁寧に磨きがかけられている。茶褐色を示すチャート質の資料である。

平安時代の石器 (第15図1～13、第16図14～21、26～28)

1～18は砥石である。砥石の出土状況は、調査区を通る農道の東側に全てが集中して出土している。東側の地形は、やや東に傾斜しており、段畦を望む所にある。出土層位は、地山直上ないし耕作土中より出土している。1と2は、出土資料の中でも最も大形品で、1は長さ16cm幅5.7cm、厚さ2.5cm、2は長さ13cm、幅5.7cm、厚さ3.4cmを測る。両方とも両面がかなり使用され、長軸に沿って使用痕が明瞭に現われている。また両サイドは全く使用されておらず、特に1は自然面が表出している。2は、使用される以前にローリングを受けたと思われるかなり丸味を帯びているのが特徴である。石質は1が安山岩、2が硬砂岩であり、使用されて表面がなめらかになっているとはいえ、表面の粒子はかなり荒目である。したがってどちらかというとな工程で使用される荒砥石的な性格が非常に強いのではないと思われる。

3～13は、荒砥石的性格とみる1及び2に対して仕上げ用の砥石ではないかと思われる。全般に表面のきめが細かく、しかもやわらかい石質である。A面及びB面はもとより両サイドまで使用しているものが多く、さらにこぐち部分までも使用痕が残っている。使用痕の方向は、長軸に対して平行に走っているものが圧倒的に多いが、さらにさまざまな角度で斜め方向に走る使用痕がかなりみられるのも特徴である。

これらの砥石もしくはすり石は平安時代の遺物としてとりあつかったが、出土地点が中世に属すると思われる第1号・2号の配列ビット群のある東側に集中していることなどを考えれば、もしかすると中世に属するものであるかも知れない。砥石が本遺跡の周辺部に於て、遺構に伴なって出土することを望むしかない。

14、15、17、18は、長軸に対して平行の使用痕が残されているが、前記した砥石とは性格が異なると思われる資料である。14はかなり熱を受け赤く焼けている。

16と19は、円錐状の石を面をとるように長軸と同一方向に磨いてある資料で、特殊磨石的形態を成している。

26～28は、何らかの石器の破片であるが、現状ではいかなる石器であるのかはつかむことができない。3点とも長軸に対して使用痕もしくは研磨痕が明瞭に残されている。

21は、原石より1回の打撃で剝離した剝離面をもち、またもう一方の側には自然面を残しているが一部自然面を剝がすための剝離が成されている。さらにその後、刃部作出のためのリタッチが行なわれている。

22は、線刻画のある石として取り上げられたものである。研磨痕のないふつうの自然石に、切り妻あるいは入雲屋の家を通して浅間山を臨むような絵にみえるが、線刻画であるかどうかの疑問と、もしも書かれたものとすれば何を書いたのかという疑問が残る資料である。

鉄製品 (第19図版57～61)

本遺跡から出土した鉄製品は、合計10点程度であり、いずれも形態がはっきりとつかめないものばかりである。その中で第19図版57～61まで示したものは、比較的良好に残っていたものである。58は、かすがいの一部ではないかと思われる。両端部が欠損している。59～61は、角釘である。

以上示してきた包含層より出土した遺物は、中世の配列ピット群に遺物が伴っているだけで他の遺構には時期等決定するための確実なる資料が出土していないため、本遺跡の性格を決定するに重要な資料となっている。

(福島邦男)

陶器

灰釉陶器

平安時代に属するものとして、2点が採集されている。1点はやや黒味を帯びた焼成の良好な碗片で、1点は黄褐色を呈するやや焼成のよくない高台付皿である。前者はやや古手のもので、後者は末期のもの、美濃産のものであるように思われる。なお後者の皿内にタール状付着物が一条あるので、燈火用皿とみてよいであろうか。

美濃系陶器

美濃系の陶器に、志野片、灰釉小鉢片、瀬戸黒片がある。灰釉小鉢片はけずり高台、ピンちの痕が残る緑褐色の釉の行われたもの、瀬戸黒釉の破片は、碗とみられるものである。

唐津系陶器

いわゆる三日月高台の黒釉碗片である。他に絵唐津と思われる小片もある。

伊万里系磁器

伊万里系の呉須染付碗片がある。

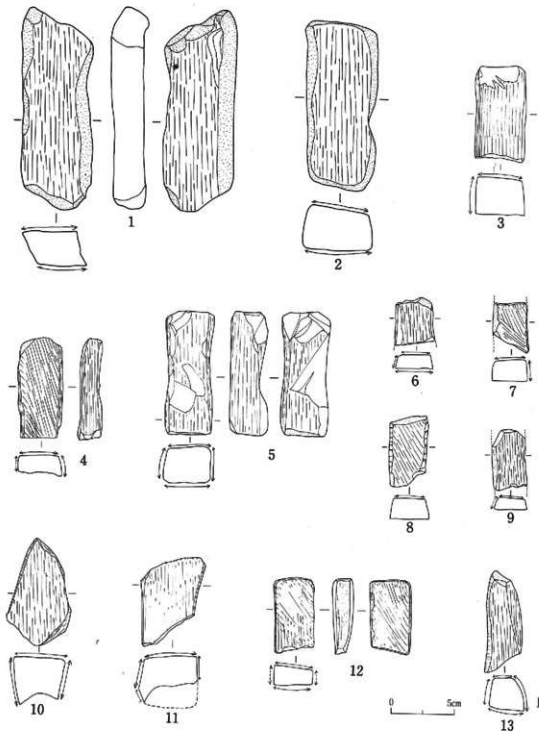
青磁

褐色の強い青磁片がある。小鉢、碗などと思われるが、にわかにはその窯を想定することはできない。

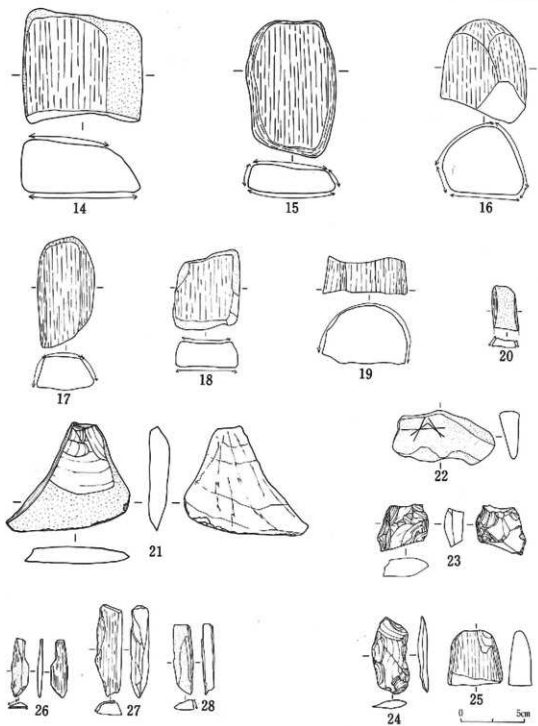
陶磁器の側面からみると、その主体が、中世末から、江戸前半にあるように思われる。注意しておきたい。

(森嶋 稔)

第4章 包含層出土遺物



第15圖 包含層出土遺物實測圖 (1:3)



第16圖 包含層出土遺物実測図 (1:3)

第5章 総括

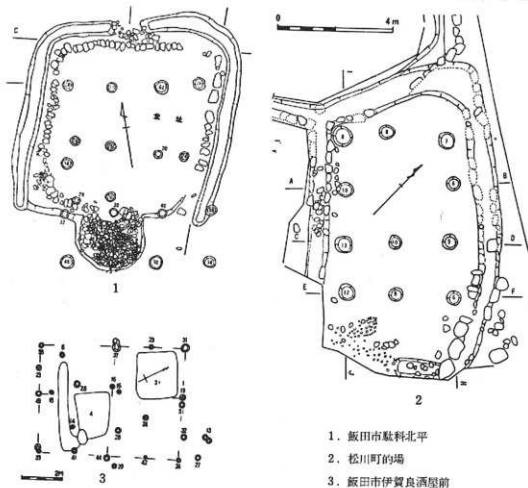
①犬飼遺跡第1次調査において検出した遺構及び建物について見ておきたい。

住居址と思われるもの3、ピット群2、いわゆる掘立柱建物址と思われる配列ピット群2、がその主なものである。

まずその住居址と思われるものについてみたい。3棟ともその全容の平面プランについては明らかにならなかったが、やや規則的でない柱穴が検出され、その上、この竪穴と思われるものが、きわめて浅いのに注意される。竪穴住居址と呼ぶにはあまりにも浅すぎるのである。平安期までに見られる内部施設としてのカマドが存在した形跡がない。火床も存在してない。こうしたものが住居跡と呼ぶいわば生活住居空間を構成していたかは、特に注意されねばならない。しかし、すでに、東部町三分南遺跡や、伊那市酒屋前遺跡での検出例でみる限り、いわば中世に属するものと思われる住居址の中に、こうした例があることに注意されるのである。この種の住居址がやはり、他の出土遺物と関連して、中世末にその時間的位置を与えることのできるものであると理解しておきたいのである。

②ピット群の性格について一考しておきたい。このまったくプランを把握できない2群のピット群については、その性格を明らかにできない。しかし、第1ピット群はいわゆる集石土壇の周辺に、アトランダムに集まっているし、第2ピット群については、いわゆる火床を中心として、アトランダムになされているとみることは可能であろう。したがって、第1ピット群については、その主たる中心遺構は集石土壇であって、第2ピット群については、火床が中心遺構であることと把握すれば、ピット群はその附属の遺構ということになるのであろう。それらが一定のプランを持たないのは、ある規則的な構造物でなかったことを意味するかもしれない。現状ではここまでの把握でどめておくべきであろう。その所属時期も明らかでないので、他遺跡での類例の増加を待って理解すべきのものであろう。

③配列ピット群についてはすでにふれたように、これを掘立柱建物址とみるのが、素直であろう。掘り方と柱穴痕との二重構造をもつものが多いので、その理解は間違っていない。一部に欠落箇所もあるが、第1号址は東西2間、南北3間の構造物、そして第2号址は、東西に3間、南北に2間の構造物とみることができる。なお、この構造物は、同時に存在したとは考えられない。それは、第1号址の配列が、南北軸の北がやや東にふれ、第2号址のそれが、やや西にふれているからである。おそらく同時にプランニングされたものならば、こうした平面プランにおける若干のずれというあり方はしなかったとみてよいように思われる。



第17図 中世の堂宇と思われる遺構

第1号址及び第2号址とも、かわらけが1点、あるいは2点出土しているのですが、おそらくは、中世末に属するものと思われるが、第2号址出土のかわらけの中で、第12図3の資料は、胎土の乳白色になるもので、どうやら1、2の資料よりは、後出するものであるように思われる。とすると、第1号址よりは、第2号址の方が新しい遺構とすることができるように思われる。

この掘立柱建物址の性格であるが、にわかには現時点で明確にすることはむずかしい。そのため伴出資料があまりにも少なすぎるからである。しかし、かわらけの伴出は重要であって、注目すべき資料と思われる。もっと言及すれば、燈明皿かと思われるかわらけのみで、他の資料を混在伴出しない、ということも理解の助けになるかとも思われる。一つにはこの遺構が、

いわば、普通の生活遺構ではないということである。生活遺構でないとする、この掘立柱建物址の性格は何であるのだろうか。一方では小竪穴の掘立柱住居を基本とするこの常民生活の常態にあって2間3間の掘立柱高床の建物の存在はやはり注意しなければならない。

中世末あるいは近世初頭の宗教的堂宇の存在とみることは可能であろうか。東北信ではまだその類例をみつけることはできないが、伊那谷では若干の資料をみることはできる。

第17図に示したものはその実測図である。1、2の北平例と的場例は、1間、3間、そして2間3間の外縁に、外部施設をもつものであり、酒屋前例は2間4間、あるいは3間4間の平面プランをもつものである。これは外部施設を持っていない、これらの遺構は若干の小竪穴状の住居址を周辺にもち、美濃系の陶器やかかわらけを伴っている。特別な堂宇に関係するような信仰関係の資料は認められていない。

本犬飼遺跡のあり方と共通する部分もあって、注意されるところが多い。今後の資料の集積と、今後の研究の進展に期待したいところである。犬飼遺跡の本資料が、そのための大きな役割りを果たす資料の一助になれば幸いである。

(森嶋 稔)

圖 版



1. 犬飼遺跡全景(小屋の周辺が遺跡)



2. 犬飼遺跡周辺を臨む(左の森が天神反、続く住宅地が花立の各遺跡)



3. 西側調査地区全景



4. 調査風景



5. 発掘調査団による調査風景



6. 役場青年婦人部による調査協力風景

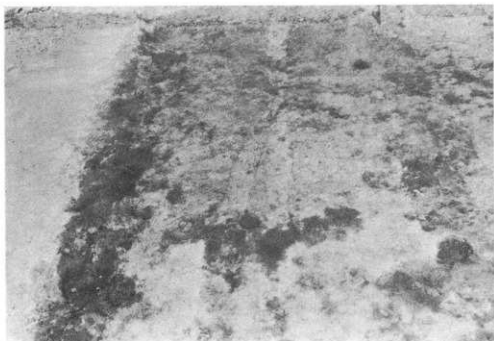
第四図版
第一号住居址



7. 第1号住居址(南側より)



8. 第1号住居址ピット(内部に石が入られている)



9. 第2号住居址(南側より)



10. 第3号住居址(南側より)



11. 第1号集石土城



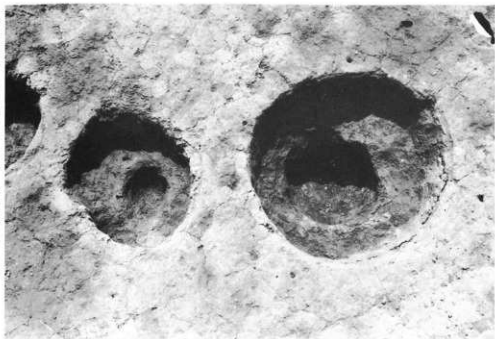
12. 第1号集石土城掘り方



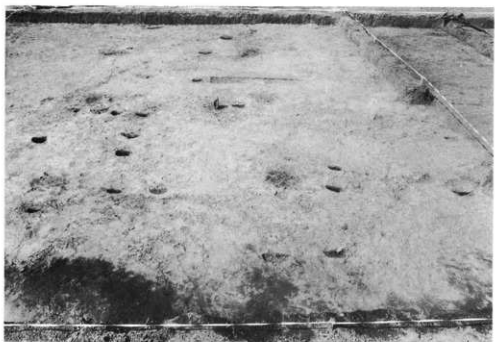
13. 第1ピット群



14. 第1ピット群北側部



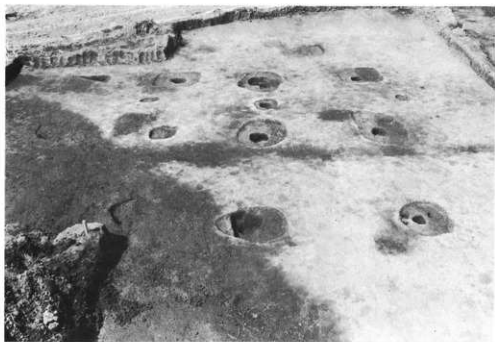
15. 第1ピット群



16. 第2ピット群



17. 第1配列ピット群(北側より)



18. 第1配列ピット群(東側より)

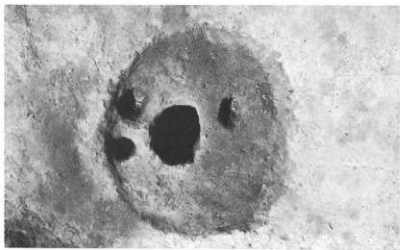
第十図版 第一配列ビット群ビット



19



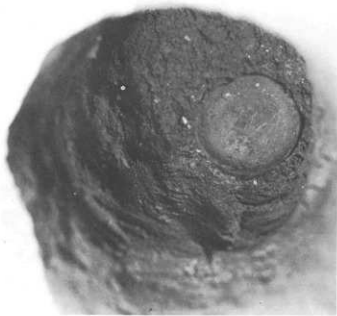
20



21



22. 第1配列ビット群ビット



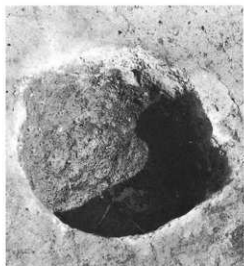
23. 第1配列ビット群ビット内遺物出土状態



24. 第2配列ピット群(北側より)



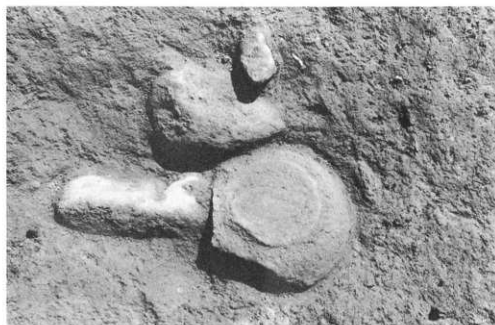
25. 第2配列ピット群及び第1号土壇(右下が土壇)(南側より)



26 第2配列ピット



27 第2配列ピット



28 第2配列ピット群遺物出土状態



29 土師器出土状態



30 線刻画があると思われる
石の出土状態



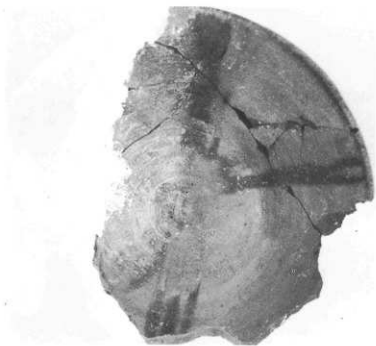
31 須恵器出土状態

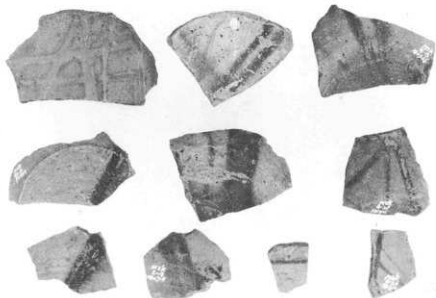


32

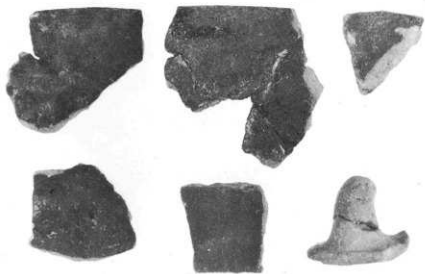


33





34 火だすきのある須恵器



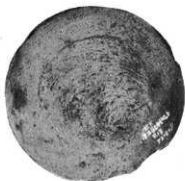
35 内環土器



36



37



第1配列ピット出土



第2配列ピット出土

第十八圖版 包含層出土遺物(砥石)



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56



57



58



59



60



61

犬飼遺跡第1次緊急発掘調査報告書

— 藤科山北麓における堂宇を中心とした中世遺構群の調査 —

印刷 昭和54年3月20日

発行 昭和54年3月30日

発行者 北佐久郡望月町
望月町教育委員会

印刷所 南佐久郡白田町2016
白田活版株式会社

犬飼遺跡第2次緊急発掘調査報告書

—— 藝科山北麓における平安時代後葉期の調査 ——

1978

長野県東信土地改良事務所

望月町教育委員会

序

ここに刊行されるに至った報告書は、県営圃場整備に伴ない、昭和53年11月から12月にかけて行なわれた犬飼遺跡の報告書であります。

近年、社会の急激な変化に伴なって発掘調査が行なわれております。望月町も圃場整備事業や国道バイパス建設工事により序々にてはありますが、発掘調査の件数が増してきております。

永い歴史に埋もれた先人の文化を発掘調査を通して知り、学問として高め、さらに今後の社会における文化を創造していく上において誠に大切なことであると思います。一方祖先が残した貴重な文化財が破壊され、失なわれていくのは残念なことにも思われます。

今回の犬飼遺跡発掘調査は、長野県東信土地改良事務所の協力を得て望月町教育委員会が発掘を担当いたしました次第であります。大変広い調査面積と、寒風の吹きすさぶ中多くの日数そして費用を要しました。ここに所期の目的を達することができましたことは、調査団長の森嶋 稔氏、その他調査員、地元作業員の協力の賜と衷心から敬意と感謝を申し上げます。

本調査を期に、「犬飼会」という文化財を考え、研究していこうという会が地元の皆様からの声で結成されました。文化財に対する理解を深めるといふ意味でも大変意義深い調査になり、誠に嬉しい限りであります。本書が文化財理解のための一助になりますことを祈願するとともに、本調査に御協力下さった方々に対し厚くお礼の意を表します。

昭和 54 年 3 月

望月町教育委員会
教育長 佐藤初雄

例 言

- 1 本書は、昭和53年に長野県東信土地改良事務所と北佐久郡望月町教育委員会との契約に基づいて作成した発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、望月町教育委員会が委嘱した発掘調査団によって行なわれ、本書の作成も発掘調査団が行ない、発行は望月町教育委員会が行なった。
- 3 遺構図は、坂口直樹、西沢 浩、福島邦男が行ない、福島が整図を担当した。
- 4 遺物の実測は、森嶋 稔、西沢 浩と福島が行ない、整図は森嶋と福島が担当した。
- 5 写真撮影は渡辺重義と福島が行ない、図版の作成は柳沢吉男と福島が担当した。
- 6 本文の執筆は、文責を文末に明記した。
- 7 本書の編集は福島が行ない、森嶋 稔調査団長の校閲を受けた。
- 8 遺物及び関係諸記録は望月町教育委員会で一括保存している。

目 次

序

例 言

第1章 発掘調査の動機と経過	1
第1節 発掘調査の動機と目的	1
第2節 調査の構成と調査団の編成	1
第3節 発掘調査日誌	3
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 考古学的環境	7
第3章 遺構と遺物	11
第1節 第4号住居址と出土遺物	12
第2節 第5号住居址と出土遺物	18
第3節 第6号住居址と出土遺物	18
第4章 包含層出土遺物	19
第5章 総 括	20

挿 図 目 次

第1図	犬飼遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図	8
第2図	犬飼遺跡地形図及びグリッド配置図	11
第3図	第4号住居址平面プラン及び断面図	12
第4図	第4号住居址出土遺物	14
第5図	第4号住居址出土遺物	14
第6図	第4号住居址出土遺物	15
第7図	第4号住居址出土遺物	16
第8図	第4号住居址出土遺物	17
第9図	包含層出土遺物	19
第10図	犬飼遺跡の埴・埴集成	21

図 版 目 次

第一図版	犬飼遺跡全景・犬飼遺跡の近景
第二図版	第4号、第6号住居址と浅間山遠望・第4号住居址
第三図版	第4号住居址北側カマド・第4号住居址東側カマド
第四図版	第4号住居址東側カマド・同貼床下部の状態
第五図版	第4号住居址東側カマドの遺物・同床面遺物出土状態
第六図版	第4号住居址出土遺物
第七図版	第4号住居址出土遺物
第八図版	第4号住居址出土遺物
第九図版	包含層出土遺物・調査風景、浅間山を臨む

第1章 発掘調査の動機と経過

第1節 発掘調査の動機と目的

犬飼遺跡は、かねてより分布調査によって微量ではあるが平安時代の遺物が散布していることが知られており、また、時折中世の陶器片が出土していたため、平安時代から中世にかけてのなんらかの遺構が存在している可能性があるということ注目されていた。

本遺跡は、昭和53年3月、望月町教育委員会と犬飼遺跡発掘調査団が主体となり、国道142号線バイパス建設工事に先立って、本遺跡にかかるルート内の埋蔵文化財を調査した。

その結果、平安時代の竪穴住居址3棟(第1号～第3号)、同ビット群2ヶ所(第1・第2)、同集石土壇1基、中世の配列ビット群2ヶ所(第1・第2)、同土壇1基が検出されている。また、遺物に関しては、縄文式時代、古墳時代、平安時代、中世、近世のものまでが出土しており、かなり長期に渡って、直接的にも間接的にも生活の場として求めていたことが明らかになった。

以上の調査を経過するなかで、同年6月に東信土地改良事務所より、やはり同じ本犬飼遺跡が、園場整備事業の対象となっているので調査して欲しいとの依頼が望月町教育委員会にもたらされた。本地区の園場整備事業は、立科町工事区であったが、地籍は望月町分であるところから、東信土地改良事務所、立科町教育委員会及び望月町教育委員会三者の会議をもち、その結果、望月町教育委員会が調査主体となり進めていくことになった。

その後、調査のための準備や調査団会議を開き、11月20日より調査が開始された。

(福島邦男)

第2節 調査の構成と調査団の編成

1. 遺跡名 犬飼遺跡
2. 遺跡所在地 長野県北佐久郡望月町大字茂田井字犬飼
3. 調査委託者 長野県東信土地改良事務所
4. 調査受諾者 望月町教育委員会
5. 調査面積 2,410㎡
6. 調査期間 昭和53年11月20日～12月28日
7. 調査方法 グリッド方式による平面発掘(3m×3m)

第1章 発掘調査の動機と経過

8. 調査団の編成

団 長 森嶋 稔(日本考古学協会会員・上山田小学校教諭)

調査主任 福島邦男(日本考古学協会会員・望月町天来記念館学芸員)

調査員 塩入秀敏(長野県考古学会会員・上山女子短大講師)

百瀬新治(" ・武石村依田窪南部中学校教諭)

児玉卓文(" ・上山染谷ヶ丘高校教諭)

渡辺重義(")

坂口直樹(" ・独協大学学生)

西沢 浩(" ・明治大学学生)

調査補助員 柳沢吉男

作業員 比田井準一・桜井卯作・吉沢弥太郎・吉沢浩典・大森英七・大沢礼市・橋詰きよ子・福島茂子・竹花 保・竹花得雄・寺嶋亮祐・大角つぎ子・黒沢好雄・遠山実・塩沢由太郎・橋詰悦子・佐藤けさみ・遠山いつじ・遠山菊次・比田井美子・柳公江・武石百合子・飯島久子・大森一尾・大森みち・佐藤辰己・大塚米子・大沢弥生・清水しづ江・大沢はまよ・倉見 花・依田ケサジ・伊沢すみ子・坂口栄子・関田和子・野上あさ子・林口清子

協力者 大沢洋三・鈴木 高(以上望月町文化財調査委員) 竹花組・桜井玲子・押野谷美智子

事務局協力者 佐藤初雄(教育長)・依田慎三(教育次長)・吉川 徹(同和教育課長)・高橋重雄・松本壯雄・平林一郎・小林三枝子・上野早苗(以上望月町教育委員会)・竹花謙一郎(望月町公民館長)

調査事務 篠原一人(社会教育課長)・大森睦男・小林良子

報道機関 信濃毎日新聞・朝日新聞・中部日本新聞・NHKテレビ・望月町公民館報

(事務局 篠原一人)

第3節 発掘調査日誌

11月16日 (木) 晴れ

調査に先立ち、本日より調査地区の桑の抜根作業を開始する。根抜は、竹花組の手を借りバックフォんで行なう。

11月17日 (金) 晴れ

昨日に引き続き、桑の抜根作業を行なう。

11月18日 (土) 晴れ

ブルドーザーによる表土剥ぎを行なう。包含層までかなり浅い部分があり、ローム層の露出が目だつ。

11月19日 (日) 晴れ

やや冷たい風の吹く中、調査員により3m×3mのグリッドを設定する。グリッドは、北-南をA-Z、西-東を1-16とする。

11月20日 (月) 晴れ

調査現場に参加者が集まり、結団式を行なう。

広範な調査地区であるため北側より仮にA地区、B地区、C地区に分けそのうち南向き緩斜面より掘り始める。O₁₁、O₁₂、P₁₁、P₁₂付近より僅かに須恵器環彩土器が出土する。桑の残根がありしかも土が固いため作業があまりはかどらない。

11月21日 (火) 晴れ

昨日に引き続き、グリッド掘りを行なうとともに、Uグリッドに土層観察のためのトレンチを掘り始める。

各グリッドより数片の遺物が出土しただけであり出土量が多くない。

11月22日 (水) 曇りのち晴れ

土層観察用トレンチには、表土下に砂質ローム及び小石混りの黄色粘質土層が現われる。

O₁₁、O₁₂、O₁₃、P₁₁、P₁₂、P₁₃より比較的多量の須恵器及び土師器の小片が出土する。ここを仮にA遺物群とする。

11月23日 (木) 曇りのち晴れ

X₄、X₅グリッドより住居址と思われる落ち込みを検出する。この付近は、かなり遺物量が多く、また耕作土が他に比べて厚味を帯びているのでかなりの期待がもたれる。

11月24日 (金) 晴れ

昨日落ち込みが確認されたX₄、X₅グリッド周辺のW₄、W₅、Y₄、Y₅グリッドを掘り、落ち込みの範囲確認作業をすすめる。一辺5m程の方形住居址ではないかとの疑いを強めたが南側の落ち込みラインは確認できない。

第3節 発掘調査日記

他のグリッド掘りも進めたが、耕作土が浅く、すぐに地山が出てしまう状態である。したがって遺物量も少ない。

11月25日 (出) 晴れ

C地区にグリッドを設定する。C地区は、地形的にA地区とB地区とのグリッドの距離を一定に保つことはできないので、東西、南北は統一することとし、新たにC地区として、北-南をイーリ、西-東を1-23とする。C地区は、B地区に比べて遺物出土量がかなり多い。

11月26日 (田) 曇り

本日は、休み。1部の人で宿舍にて遺物洗いを行なう。

11月27日 (田) 曇り

W_1 、 W_2 、 X_1 、 X_2 、 Y_1 、 Y_2 で確認された落ち込みは、住居址であることが解かり、第4号住居址とする。遺構ナンバーは、3月行なわれた犬飼遺跡第1次緊急発掘調査で検出された遺構ナンバーの続きとする。

11月28日 (火) 晴れ

北側斜面にあるA地区のグリッド掘りを始める。遺物がほとんど出土しない。

N_{12} 、 N_{13} 、 N_{14} 、 O_{12} 、 O_{13} 、 O_{14} 、 O_{15} 、 P_{12} 、 P_{13} 、 P_{14} 付近には、土師器、須恵器の環形土器片、甕形土器片がかなり出土しているの、住居址の存在をうかがわせている。この地点は、本遺跡のうちでも最も表土が浅い所であるため、すでに破壊されてしまった可能性も考えられる。

N_{12-14} 、 O_{12-14} 、 P_{12-14} の遺物集中区より、破壊されたカマドの跡と思われる焼土塊が見つかる。遺物の集中範囲から見て、プランこそ確認できないが第5号住居址とする。新しい時期の溝状の落ち込みも付近を走っている。

11月29日 (休) 晴れ

A地区は、千鳥方式にて全面掘り下げを終わったが、遺物はほとんど出土せず、また遺構も全く確認できなかった。

11月30日 (休) 曇り

C地区のグリッド掘り下げを進める。相変わらず遺物の出土量は多い。しかし、かなり耕作による攪乱が目立ち遺構は確認できない。

B地区の S_1 、 S_2 、 T_1 、グリッドの掘り下げを続行していたが、遺物が比較的多く出土し、また、第5号住居址と同様破壊されたカマドの焼土塊が検出されたため、第6号住居址とする。

12月1日 (金) 曇り

第5号住居址と第6号住居址のプラン確認作業を行なう。両遺構とも耕作による攪乱によって完全に破壊されていることが明らかになった。また第4号住居址プランの再確認を行なう。南側に傾斜する地形であるため、南側壁面は耕作により破壊されたことが明確となる。

12月2日 (土) 雨

本日は、雨天のため遺物の洗浄作業をする。

12月3日 (日) 晴れ

第4号住居址の覆土掘り下げを行なう。北側壁面よりカマドが確認される。またカマド付近に集中して、土師器、須恵器の環形土器、甕形土器の破片が多量に出土する。

12月4日 卯 晴れ

昨日に引き続き、第4号住居址の覆土掘り下げを行なう。カマドはかなり崩れており原形を保っていない。壁面は北側ほど高くなっており、比較的良好的な状態であった。床面が現われる。

C地区に於ては、土がやわらかく掘り易いことも手伝って大分能率が上がっている。依然として遺構がつかめない。

12月5日 戌 晴れ

第4号住居址の南側壁面は、完全に破壊されていることが解った。カマドより完形の須恵器環形土器が出土するとともに、大きな破片の遺物が比較的多く出土する。北西角に柱穴が確認される。また、この柱穴の掘り切り付近に、焼土塊が存在しているのがみつけた。

12月6日 酉 晴れ

C地区のグリッド掘り下げ部分で、特に遺物が集中して出土する部分が見つかり、住居址ではないかとの疑いをもつ。

第4号住居址の全容がほぼ明らかとなる。

12月7日 申 晴れ

第4号住居址の清掃作業をする。C地区の掘り下げを続行する。

12月8日 未 晴れ

第4号住居址の写真撮影を行なう。その後平板測量を行なう。

12月9日 巳 晴れ

第4号住居址の平板測量とともに、出土土器の取り上げ作業を行なう。床面の精査の結果、東南部に落ち込みのあることが確認され掘り下げを行なう。土師器の甕形土器片を中心としたかなりの量の遺物が出土する。また新たにカマド跡が見つかり、本址における古いカマドであることが解かった。

12月10日 辰 晴れ

昨日に続き、第4号住居址の精査を行なう。遺物の出土がかなりの量に及ぶ、掘り下げを完了し、写真撮影のために清掃を行なう。

12月11日 卯 晴れ

昨夜来の雨で、現場作業が不可能となり、遺物洗いをする。

午後、第4号住居址の写真撮影を行なう。

12月12日 寅 曇り

第1号住居址の平板測量を行なう。また合わせて遺物の取り上げを行なう。

C地区は、かなりの面積に及ぶグリッド掘りが成されているが、以前と同様多量の遺物に比べ遺構が全く確認できない。

12月13日 卯 晴れ

第3節 発掘調査日記

第4号住居址のカマド断面図をとるために断ち割り作業を行なう。焼土内より遺物が僅かに出土する。また、新たに検出されたカマドの精査を行なう。立ち上がり部分は全く存在しないが、焼けた地面より明確にプランをつかむことができた。

12月14日 (木) 晴れ

第4号住居址の2つのカマドの実測を行なう。これによって、第4号住居址の調査は全て完了する。午後から遺跡全体測量を行なう。

12月15日 (金) 曇り

C地区も設定したグリッドはほぼ掘り終り、特に遺物の集中する箇所の精査にとりかかる。遺跡全体測量を引き続き行なう。

12月16日 (土) 曇り

昨日と同様の作業を進める。

すでに12月の中途となり、かなり日中でも寒さが増して来た。

12月17日 (日) 晴れ

C地区に於ては、一段と掘り下げを進め、その結果、焼土と木炭の混在する部分が確認された。

全体測量を行なう。

一部の人たちには、土器洗いをやっていただく。

12月18日 (月) 雪のち曇り

朝から激しい雪が降り出した。雪の降る中全体測量とC地区掘り下げを行なう。

12月19日 (火) 曇り

昨日の作業を続行する。

12月20日 (水) 曇り

C地区は、遺構の存在をうかがわせていたが、プランの確かな立証はできなかった。したがって本日で作業を終了する。また遺跡の全体測量も本日で完了する。

夕方より打ち上げ会を行ない、現場での全ての調査を終了した

12月21日(木)～12月28日(木)

21日より28日まで、一部の人員によって遺物整理作業を行なう。この期間で、洗浄、注記、接合をほぼ完了させた。

一ヶ月余に及ぶ調査の中で、検出された遺構は僅かであったが、一グリッド一グリッド丁寧に調査が進められ、確実に犬飼遺跡の現状を把握できたと考える。

(柳沢吉男・福島邦男)

第2章 遺跡の環境

第1節 位置と地理的環境

犬飼遺跡は、蓼科火山によって形成された低位な丘陵の南斜面上に位置している。この茂田井地区一帯は、同様の低位な丘陵が南北に幾筋も走っており、いずれも小規模でなだらかな地形を成している。しかし、御牧原台地のごとく800m~700mも続く平坦面があまり発達してはならず、八重原台地の一連の地形であるとはいえ、茂田井付近ともなれば徐々に高度を増し蓼科山の裾野に連なっている。この南北に走る丘陵は、茂田井付近にあっては、新世代第四期更新生ローム及び火山岩層によって形成されており、表土下十数センチの所ですてにみられる。また、砂礫がかなり厚く堆積している部分も見られる。遺跡はこれらのいわゆる筋ともいうべき南北に走る丘陵の緩斜面に立地している場合が多い。

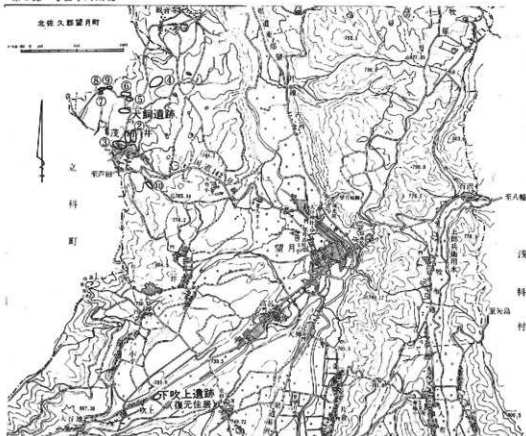
犬飼遺跡の眼下には、規模の小さな下川が流れており、かつてはこの川によって形成された小河岸段丘が発達している。この地帯には、3ヶ所の湧水と1ヶ所の鉱泉があり、現在でもかなり水量が豊富である。低地に於てはむしろ湿地状になっており、この湿地帯を望む所にこの付近一帯の遺跡が存在しているとも言える。

いずれにしても本遺跡は、南向き緩斜面で、非常に日当りの良い所に立地していると言える。
(福島邦男)

第2節 考古学的環境

茂田井地域は、立科町と境を隔てる丘陵から東側のややすり鉢状の地形を成し、観音寺に向かって流れる下川の浅い谷の南側に遺跡が集中している。これらの遺跡は、台地とやや湿地性に富む水田面に立地している縄文式時代の遺跡と、丘陵斜面あるいは扇状地形に立地している平安時代の遺跡とに大きく大別することができ、また、台地に立地する奈良時代から平安時代にかけての寺院と思われる所もある。

以下遺跡ごとにその概要を述べておく。



第1図 大阿遺跡位置図及び周辺主要遺跡分布図 (1 : 40,000)

① 天神反遺跡 (茂田井字天神反)

大阿遺跡の南方200mの上部平坦な台地上に位置している。この遺跡は、縄文式時代中期、奈良時代～平安時代の遺物が多量に出土している。まだ発掘調査はないが、縄文式時代中期後葉の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、スクレーパー、石皿、凹石、多孔石、石棒、石匙、土偶等ありとあらゆる生活セットが耕作や表面採集の時にみつかる。縄文式時代の遺跡としては望月町の中では最大級のものである。また、同様の地点に布目瓦がやはり多量に散布しており、かつて信濃の妙楽寺がここにあったという伝説がある。

② 用水尻遺跡 (茂田井字用水尻)

本遺跡は、天神反遺跡のある台地のすぐ下、東側の水田及び畑地にある。小字用水尻という地名の通り、湧水から流れ出る水が、本遺跡の中央を通っており、非常に水量の豊富なところである。恐らくは天神反遺跡と一連の遺跡であろうと推察できうる。現在でもかなり遺物の散布量が多いが、縄文式中期末葉の深鉢形土器、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石棒、石匙、ヒスイの曲玉、土偶等が出土している。

③ 花立遺跡(茂田井字花立)

花立遺跡は、天神反遺跡に続く南側の台地上と西側の第一段丘上に位置している。遺跡の中心部には現在人家が立ち並び、また大部分は水田となっている。本遺跡も恐らくは天神反遺跡と用水尻遺跡との一連の遺跡であろうと思われる。出土遺物には、縄文式時代中期の深鉢形土器をはじめ、打製石斧、磨製石斧、石皿、凹石、石臼、石棒等の豊富な遺物が出土している。

④ 夜討村遺跡(茂田井字夜討村)

茂田井地区に於いては代表する平安時代の遺跡である。夜討村遺跡は、犬飼遺跡の対岸の扇状地、下川の流れる低位水田面より東側へやや登った所に位置しており、東西200m、南北150mを測る大きな遺跡である。近年、朝蘇人蔘耕作や畑地の区画整理によってかなり破壊されてしまった。出土遺物は、須恵器を中心とした環形土器や甕形土器が多数あり、そこに土師器が伴うというあり方をしている。また灰軸陶器も僅かながら出土している。

⑤ ⑥ 大仁反及び大仁反尻遺跡(茂田井字大仁反・字大仁反尻)

本遺跡は、犬飼遺跡の北方350mの丘陵上に位置している。この両者の遺跡は、犬飼遺跡の存在する丘陵上にあるが、立地的には犬飼遺跡とかなり似かよっている。犬飼遺跡発掘調査中に朝蘇人蔘耕作のための深掘りを行なっている時に5基以上のカマド跡がみつかり、また多数の須恵器環形土器、甕形土器、長頸壺、土師器の甕形土器が出土した。すでに調査せずに大部分が破壊されてしまった。恐らくは、犬飼遺跡、夜討村遺跡と並ぶかなりの集落址があったと思われる。

⑦ 堀込峯A遺跡(茂田井字堀込峯)

堀込峯A遺跡は、望月町と立科町とを分ける南北に走る尾根の東側斜面に位置しており現在はブドウ畑となっている。ここからは、犬飼遺跡をはじめ天神反遺跡や夜討村遺跡など、この付近一帯の遺跡を全て見わたすことができる。遺跡は、土師器と須恵器で散布量はあまり多くない。

⑧ 堀込峯B遺跡(茂田井字堀込峯)

望月町と立科町を分ける尾根上を通っている農道の西側の畑地が遺跡である。この付近では最も高い尾根の一つでもあるため、望月分と立科分とを一処に見わたすことができる。遺物は、ごく僅かな土師器と須恵器が散布している。

⑨ 南青木原遺跡(茂田井字南青木原)

本遺跡も、堀込峯A及び堀込峯B遺跡と同様の尾根上に位置しており、遺物は土師器と須恵器で散布量が少ない。

⑩ 又久保遺跡(茂田井字又久保)

又久保遺跡は、望月から国道254号線で茂田井に入った南側の低位な沢状の地形を成してい

第2節 考古学的環境

る所に位置している。ここには、尾根の中腹を通る小さな峠道があり、付近には「古道」と名付けられている小字名が残っている。出土した遺物は、小形耳皿、手づくねの小壺があり、いわゆる祭礼用遺物として捉えることができる。これらは、先の例にもれず朝鮮人蔘耕作の時に出土したものである。

以上概略的に周辺に位置する遺跡を述べてきたが、犬飼遺跡と近似するものとしては、やはり夜討村遺跡と大仁反、大仁反尻遺跡があげられるかと思われる。しかし、この三者も犬飼遺跡と比較すると若干時期的に新しさが目だつ。その意味では、犬飼遺跡が茂田井地区の平安時代の遺跡としては、最も古く位置づけられ重要性が認識されることである。

(福島邦男)

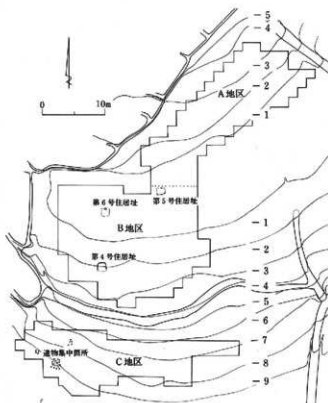
第3章 遺構と遺物

大銅遺跡第1次発掘調査に於ては、平安時代の住居址3棟、同集石土坑1基、同ピット群2ヶ所、それに中世の配列ピット群2ヶ所(高床式建物址)が検出され、平安時代中期初頭から中世までの遺構が確認されている。

本第2次調査に於いては、平安時代初頭の住居址3棟が確認され、他に遺物が濃密に集中す

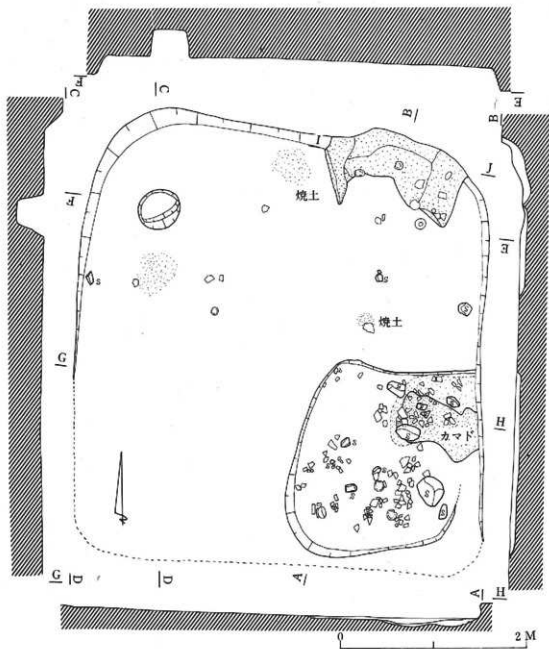
る所があったが、遺構としては捉えることができなかった。

遺物は、縄文式時代、古墳時代、平安時代、中世、中世以降のものが出土しており、遺構に伴うものは全体からすると少なかった。これらの遺物の傾向は、第1次調査と同様である。



第2図 大銅遺跡地形図及びグリッド配置図 (1:800)

第1節 第4号住居址と出土遺物



第3図 第4号住居址平面プラン及び断面図(1:40)

遺構 (第3図・第2図版)

本址は、南側緩斜面であるB地区の西寄りの所で検出された。A地区とB地区の接点であるPグリッド部分が、本遺跡では最も高い位置に当り、そこよりなだらかな斜面を下ったX₄、X₅、Y₁、Y₆にある。遺跡全体の耕作土が浅く、しかも傾斜しているため、他の第5号、第6号住居址の例にもれず耕作により削られてしまっている部分が目立つ。

プランは、東西4.4m、南北4.7mを測る隅丸方形を成しており、壁高は、最も高い部分で25cm、そこから南側に続くに従ってしだいに低くなり、南側壁面は耕作により完全に削り取られてしまっている。壁面はかなり固く締まっているところから、タタキが成されたことも考えられる。カマドは、北側壁面に沿った中央よりやや東寄りに存在し、さらに東側壁面に沿った所にも確認された。この二つのカマドはもちろん本址に伴なうものであり、また新旧の関係として捉えることができる。東側のカマドは、すでに上部構造が存在せず、しかも貼床の下で見つがっている。恐らくこのカマドが先に使用され、取りこわして貼床を行ない、新たに北側に構築したものと考えられる。焼土しか残っていないこのカマドは、長さ95cm、幅60cmを測り、付近には焼けた石が数個存在しているところから、石組みもしくは石と粘土により構築したものと考えられる。一方北側のカマドは、全て粘土により構築されており石は使用されていない。上部構造と釜口部はかなり破壊されているが、全体の形態はよくつかむことができる。現存部で幅140cm、奥行80cmを測り比較的大きなものである。床面は、東側カマドがあった付近は貼床が成され、他はタタキが成されたように固く締まっており、地山(ローム)上というよりもむしろ黒色土との混在された状態であると言ってよい。柱穴は、北西隅に1ヶ検出されたが、他は精査しても検出することができなかつた。

遺物(第4～8図・第6～8図版)

本住居址の出土地点は、大きく分けると北側のカマドとその付近、もうひとつは、北側カマドが構築される以前に使用されていたカマド周辺部、すなわち貼床下部となる。その他柱穴周辺部などに僅か出土している。

第5図1は、東濃地方より投げ込まれたと思われる灰釉陶器の皿形土器である。全体にかなり丁寧に水引きが行なわれている。底部には付け高台が成され、その部分に対してヘラ整形が行なわれている。灰釉は口縁部から胴部中部にかけて付けられており、外面は白っぽく、内面は薄茶色になっている。胎土はかなり精製されており、一見して東濃系である。

3～8は、土師器の高付埴形土器である。3は半欠品であるが、中では器形が良くわかる資料である。全体が水引きによってかなり厚手に作られており、後に付け高台をしている。外面は赤褐色、内面は薄い黒色の研磨が成されている。焼成はややもろい。4～6もやや器形は小形であると思われるが、外面赤褐色、内面は黒色研磨が成されている。7は足高高台を有する土師器の埴形土器である。糸切り底に足高の高台が付けられており、全体が赤褐色を呈し、ややもろい焼成である。

9～12は、皿形を有する土師器の埴形土器である。器高は4cm～5cmを測り、口縁部直径13.5

第1節 第4号住居址と出土遺物

cm~14.3cmである。この4点の傾向は、口縁部の直径が小さい器器高が高くなるということがみられる。器厚はほぼ一定している。これらの土師器で特に言えることは、口縁部になるほどしだいに薄くなり、口唇に至ってやや肥厚しながら外反していることである。9~11は内面黒色研磨である。

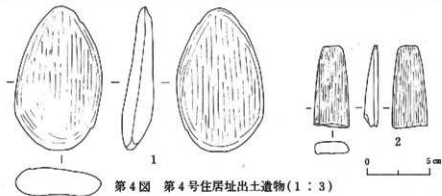
13は、土師器の皿形土器である。口縁部直径13cm、器高2.6cm、厚さ0.3cm~0.5cmを測る。口縁部はやや肥厚して外反し、そこから外側にややふくらむように出てからいっきに底部に至っている。したがって口縁部直下には段がめぐるっている。また底部は高台作出がごとく厚味をもたせ段をつけて糸切りを行なっている。外面は赤褐色、内面は黒色研磨を行なっており、焼成はややもろい感がある。本品は、貼床下部より正位で出土しており、完形品である。

第6図14~16は、火だすきのある須恵器坏形土器である。器形が全体にゆがんでいるところが特徴である。内面及び外面にかなり強く火だすきの痕がついている。底部から胴部への立ち上がり部が3点とも肥厚しており、胴部は埴形にやや丸味を帯びている。14には口縁部直下に「平」の墨書が描かれており、本遺跡唯一のものである。「佐久平」あるいは「何々平」の意味であろうか。第1次調査に於て、高台付坏形土器の底部に、ヘラによって「佐」という刻字が行われているものが包含層から出土しているが、あるいは関連するものであろうか。

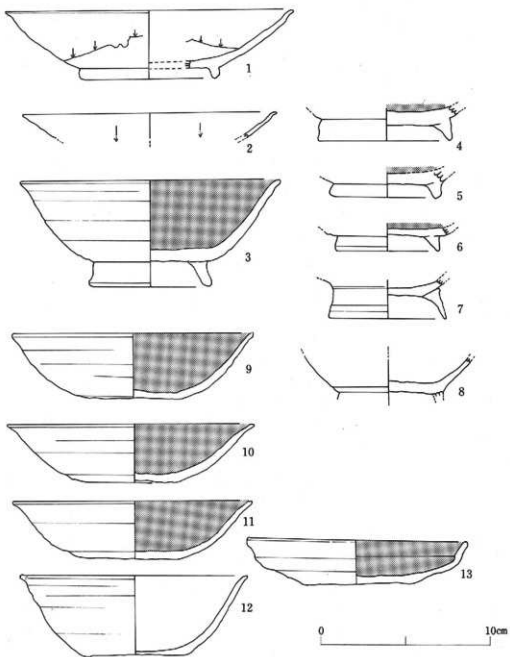
17~24は、須恵器坏形土器であるが、その焼成方法と製作技法により若干の差異を認めることができる。17~19は、灰乳色及び乳白色を示す瓦質の焼成で、まことに良質の資料である。20~22は、酸化炭焼成による須恵器であり、言ってみれば焼きそこないとても表現できようか。したがって器面の色がかなり異なっており、黄赤褐色の部分や黄灰色の部分などがある。しかしそれほどもろさはなく比較的固い。その23~24は、水引き整形の後糸切りを行ない。その後ヘラけずりを行なっているものである。図上復元のできない破片の中に、糸切りを行ないその後ヘラけずりを行なっているものがかなり多量に含まれていることを付け加えておく。

第7図25~28は、土師器甕形土器である。いずれも水引きにより作られており、口縁部はヘラによる横なで整形、また、25・26は頸部から胴部にかけて、横方向のヘラけずりが成されている。

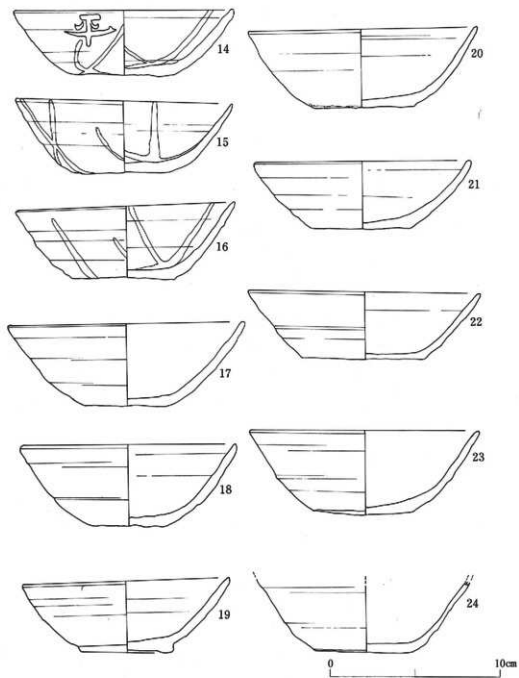
本址に於て出土した多量の遺物のうちの一部のみを図示したことを付記しておく。(福島邦男)



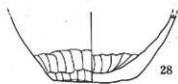
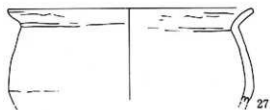
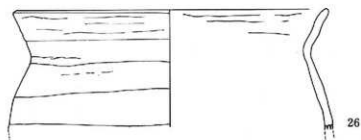
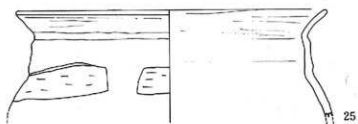
第4図 第4号住居址出土遺物(1:3)



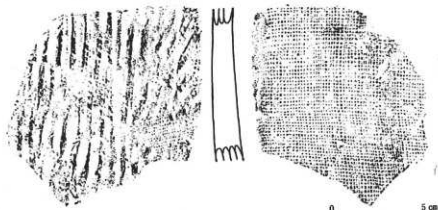
第5図 第4号住居址出土遺物(1:2)



第6図 第4号住居址出土遺物(1:2)



第7図 第4号住居址出土遺物(1:2)



第8図 第4号住居址出土遺物(1:2)

第2節 第5号住居址と出土遺物

遺構(第2図)

本址は、本調査地区に於いて最も地形的に高い所で検出され、かかるグリッドはO₁₂とP₁₂グリッドとの中間点である。前記したようにカマドの残存部が僅かに検出されただけで、住居址プラン等も耕作による破壊が激しく確認することができなかった。

遺物

遺物は、このカマド残存部付近で比較的多く出土しているが、プランもつかめず確実に本址に伴なうものかどうかの疑問も残るのでいちおう包含層遺物として処理をした。

器種は、土師器の坏形土器を主体に、土師器、須恵器の甕形土器及び須恵器の坏形土器が出土している。
(福島邦男)

第3節 第6号住居址と出土遺物

遺構(第2図・第2図版)

本址は、第4号住居址の北側で検出され、かかるグリッドはS₆である。第5号住居址と同様耕作による破壊が激しく、僅かなカマド残存部を残すだけで他のプランは全く存在していなかった。

遺物

やはり本址の遺物も第5号住居址と同様にカマド付近に散乱していたが、住居址に伴なうものとしては処理しなかった。したがって包含層遺物とした。

器種は、土師器、須恵器の坏形土器、甕形土器片が出土している。
(福島邦男)

第4章 包含層出土遺物

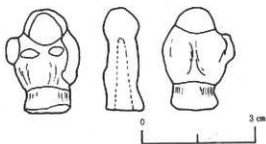
本調査地区に於けるグリッドから出土した遺物は、B地区及びC地区に集中しており、A地区に於ては皆無といつてよいほどであった。

B地区では、前記したように第5号住居址と第6号住居址の周辺部に集中しており、遺構の破壊に伴う散乱であると思われるが、いちおう包含層遺物としてとり上げているものが中心を成している。C地区に於ては、ほぼ全体に出土が認められたが、特にホートグリッドよりかなり濃密に出土している。このC地区の出土のあり方は、第1次調査のそれと同様の状態がみられる。

出土遺物は、土師器及び須恵器の環形土器片、甕形土器片が主体を成しており、その他中世、近世の陶器片や時期不詳(江戸時代頃のものか)の人形を呈する土製品(ドロメンコ)(第9図・第9図版26)などがある。また縄文式時代の打製石斧(第9図版27)やスクレーパー(第9図版29)、それに黒曜石片などが出土している。

全体の傾向として平安時代後葉の遺物を主体にかなり時間的に幅のある遺物が出土していることが特徴といえる。

(福島邦男)



第9図 包含層出土遺物(1:1)

第5章 総括

大畑遺跡の第2次調査の焦点は、第4号住居址のあり方をめぐるものであろう。

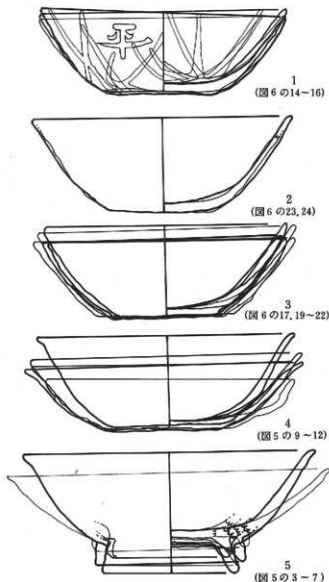
第4号住居址は、その構造上の問題としてまずこの住居址が補修されたものであるということである。東側にかつてあったと思われるカマドを廃絶して、北側の中央東寄りに再構築しているのである。古い位置のカマドは廃絶後、きれいにその周辺の附属遺構とともに整地され、粘土によるていねいな張り床となっているのである。その床面補修の際、ここに多量な土師器及び須恵器の資料群が埋没されたのである。ここにはその資料の三分の一以下を提示したにとどめたが、あまりにも量的に見て、例外な程多いことに注意しなくてはならない。しかしその多くは、あまりにも小片であって図上復元も可能でなかったのである。意図的な破壊が行われた後に、カマド破壊、床面補修が行われた際に埋没されたものであるかもしれないのである。

カマドの位置について見ておきたい。ともに、この住居平面プランの中心軸よりも、右に片寄って構築されていたらしいことは明らかである。礎石を基礎として、粘土で固めての構造とみてよい。いずれにせよ、いわゆる千曲川水系第四様式(奈良時代)とそれ以前にはまったく行われなかった平面プラン上の位置であることは言うまでもない。住居内の床面にうけられた上屋をささえる柱穴も、明確なものは1本のみであるが、これも、あるいは、積極的に柱穴と言うことはできないかもしれない。ことした不明確な柱穴のあり方もまた第四様式期にはなかったものである。上屋構造の問題とも関連して、大切な所見である。いずれ第五様式期に入るあり方をしていることに注意されるところである。

遺物群の側面からみておきたい。灰釉陶器は東濃系のざっくりした胎土で、やや焼成のよくないものである。そのコピーとしての土師器の内面黒色処理をした高台付の埴(第10図5)がある。糸切り底の内面黒色の土師器埴(第10図4)、そして火だすきのある糸切り底の須恵器の埴(第10図1)、火だすきのないもの(第10図3)、そして更に糸切り底でへら調整痕のある須恵器の埴(第10図2)がある。これらは一時期のものとは思われない。すくなくとも最も古い資料がこの埴群であろうし、最も新しいものが、5の高台付の埴であろう。その時間的な開きは、第五様式における第I期から第III期までの時期を与えることができるものであろうから、すくなくとも1世紀の差が内在しているかもしれない。しかし、それが、仮に一時的の所産と考える(同一住居址収出土である)とこれはまた、第4号住居址の大きな特色とすることができる。古い様式と新しい様式とが混在している特殊なあり方とみななければならない。この佐久地方では、灰釉陶器の侵入が必ずしも多くないが、その現実には、意外に須恵器生産の温存となって結果していたかもしれない、との予想が成り立つ。そうしたとき、ここで見られるような現象が、この地方の普遍的なあり方であるかもしれないと考えることも可能であろう。そう見たとき、第五様式第IIIあるいは第IV期の間にもう一つのステップとしてみることのできる時期であるとすることもできるであろうか。

第10図の集成図は、器体内部の底を基点としたものであるが、これは極めて、示唆に富む課題を明示している。ここでは、課題の存在を提示するにとどめるが、いずれモデルとコピーの問題を中心として、かなり興味ある問題点が内容していることが読みとることができるといえる。

天神反遺跡出土の布目瓦と同様なもの(第8図)が第4号住居址から出土している。天神反に古代廃寺の存在を仮定すると、これはおそらく、9世紀代には存在したものとみてよい資料である。そこに使用された瓦片が、この住居址から出土したということはやはり、重要な所見といわざるを得ない。天神反廃寺の廃絶の時期とも相関する問題でもあるかと思われるのである。注意すべき資料である。



第10図 犬飼遺跡の坏・埴集成

江戸時代末のものと思われるドロメ
ンコが一点採集されている。こうした
ものの分布やその背景などつい手のと
どく時間的範囲にありながら明確にな
らないものもある。大方の御教示を得
たいところである。



第1次及び第2次を通じて、いわば
平安時代から中世末に至るまでの遺構、
遺物群を検出したこの犬飼遺跡はかな
り、特色のある遺跡地帯であると言
うことができる。とりわけ、中世堂宇を
めぐる問題、そして、第5様式第三、
第四期にまたがる第四号住居址のあり
方など、特に今後はその認識を深めて
行くための大きな手がかりを提供した
と評価することができる。本調査の果
した大きな役割であった。

終りにあたり、27年に及んだ調査
に献身的な役割を果し、今病を得て療
養の身である調査主任の福島邦男君に、
深く感謝と御見舞の言葉を捧げるもの
である。もちろん、調査員、作業員、
そして事務局の方々にも深い感謝と敬
意を表すものである。

(森嶋 稔)

圖 版



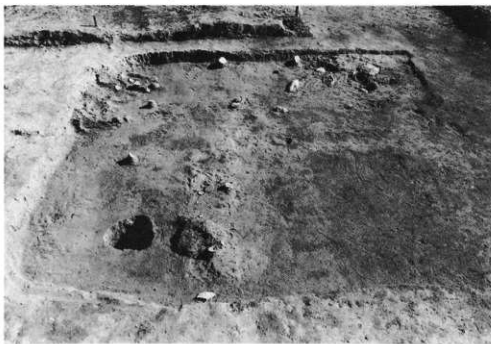
1. 犬飼遺跡全景(小屋の周辺部が遺跡)



2. 犬飼遺跡の近景(左の森が天神反・その右が花立の各遺跡)



3. 手前が第4号住居址・斜め右上が第6号住居址



4. 第4号住居址(西側より)



5. 第4号住居址北側カマドと遺物出土状態



6. 第4号住居址東側カマドと遺物出土状態(完掘前)



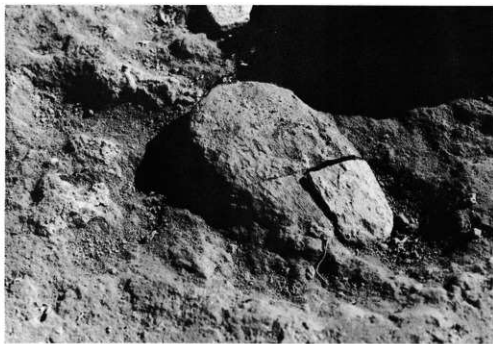
7. 第4号住居址東側カマド付近遺物出土状態



8. 第4号住居址貼床下部の遺物出土状態



9. 第4号住居址東側カマドの遺物出土状態



10. 第4号住居址床面出土の石製品

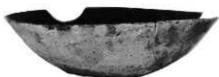
第六圖版 第四号住居址出土遺物



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20

21



横面より

22

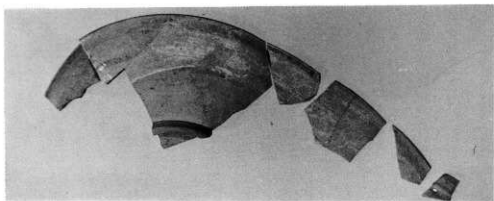


上面より

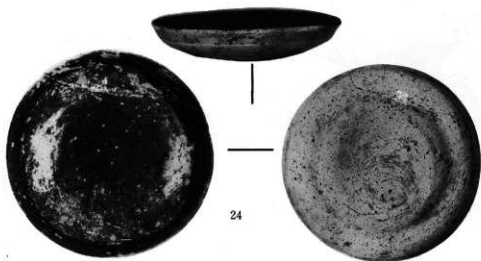


下面より

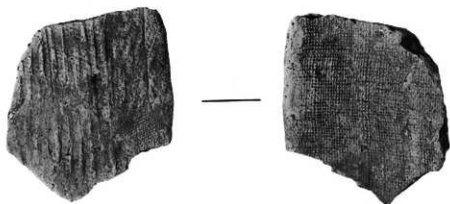




23



24



25



26



27



28



29



30



31. A地区調査風景(右浅間山を臨む)

犬飼遺跡第2次緊急発掘調査

— 蓼科山北麓における平安時代後葉期の調査 —

印刷 昭和54年3月20日

発行 昭和54年3月30日

発行者 北佐久郡望月町
望月町教育委員会

印刷所 南佐久郡白田町 2016
白田活版株式会社